西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集

祇園原地区遺跡

県営一般農道整備事業（祇園原地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

宮崎県西都市教育委員会

1． 調査区全域（南から）

2． 調査区全域（東から）

序

古く、日向国の中心地であった西都市には多くの文化財が分布しております。これらの貴重な文化財を後世に伝えるのは我々の責務であり、本市では文化財の保護、活用に努めてきていますが、農業基盤整備事業や、各種の開発事業によって影響を受ける遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

西都市教育委員会では、平成15年度県営一般農道整備事業（祇園原地区）に伴い、西都市大字右松所在の祇園原地区遺跡の発掘調査を行いました。本書は、その遺跡調査をまとめたものであります。

今回の調査では県内でも出土例が少ない縄文時代前期後半の曾畑式と呼ばれる土器の破片が多く出土し、石器も出土しました。

また、墳丘の消失した円墳の周溝も確認され、そこからは土師器と須恵器の破片が出土しました。

今回の調査により得られた成果は、西都市の先史時代を理解するためには極めて重要なものであります。

本報告が学術的な研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための一助となれば幸いです。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた宮崎県児湯農林振興局、宮崎県教育庁文化課や発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成16年3月25日

西都市教育委員会

教育長　黒　木　康　郎

例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が宮崎県児湯農林振興局の委託を請け、平成15年度実施した祇園原地区遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、途中工事による中断を挟んで平成15年7月7日から平成15年12月5日まで行った。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査は、津曲大祐が担当した。
5. 調査及び図面作成は、津曲が行い発掘調査者全員で補助した。
6. 遺物の実測・拓影は津曲が行い、一部、拓影を平野隆之（福岡大学学部生）の協力を得た。遺構・遺物の浄書は津曲が行った。
7. 本書の執筆・編集は津曲が行った。
8. 本書に使用した方位は、座標北（G．N.）と磁北（M．N.）である。
9. 本書に使用した標高は、海抜絶対高である。
10. 報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修の『新版標準土色帳』に準拠した。
11. 石器の観察と解釈については藤木聡氏（宮崎県埋蔵文化財センター）、縄文土器については菅付和樹氏（宮崎県埋蔵文化財センター）、陶磁器は柳田晴子氏（宮崎県埋蔵文化財センター）の御教示を得た。
12. 本書で使用した空中写真は（有）スカイサーベイ九州に委託した。
13. 出土土器の胎土分析は（株）古環境研究所に委託した。
14. 本書で使用した遺構・遺物の写真は津曲が撮影した。遺物の写真撮影に関しては宮崎県埋蔵文化財センターの写場を使用させていただいた。
15. 本書で使用した「祇園原地区遺跡」という名称は、調査区の位置する台地上に所在する遺跡をまとめたものである。当地区周辺を先行して調査･報告した宮崎県教育委員会、新富町教育委員会がこの名称で遺跡群をまとめていることから混乱を避けるため名称を統一した。
    また、本調査は県教委の行った調査から数えて祇園原地区遺跡第14次調査となる。

目　次

第Ⅰ章　序説
第１節．調査に至る経緯 …… 1
第２節．調査の体制 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境
第１節．立地 …… 5
第２節．歴史的環境 …… 5
第Ⅲ章　祇園原地区遺跡の調査
第１節．調査区の設定と概要 …… 6
第２節、遺構と遺物 …… 6～26
第Ⅳ章　祇園原地区遺跡出土土器の自然科学分析 ‥‥27～28
第Ⅴ章　まとめ ……29～33
報告書抄録 ……43

挿図目次

図 1．周辺遺跡分布図（1／25000）
図 2．調査区位置図　（1／10000）
図 3．調査区と新田原古墳群祇園原支群との位置関係（S＝1／20000）
図4．調査区全体図（1／1000）
図5．溝土層図（1／40）
図6-1．2-1区遺物出土状況（1／300）図6-2．2-1区基本層序1　6-3．基本層序2
図7-1．2-2区包含層検出状況（1／300）　7-2．2-2区A-B間土層図　7-3．2-2区基本層序1　7-4．2-2区基本層序2
図 8．2-2区A層遺物出土状況（S＝1／200）
図 9．2-2区B層遺物出土状況（S＝1／200）
図 10．2-1区、2-2区A層出土縄文土器1（S＝1／3）
図 11．2区A層出土縄文土器（S＝1／3）
図 12．2区A層B層出土縄文土器（1／3）
図 13．2-2区B層出土縄文土器・石器（1／2、1／3）
図 14．2区A層出土遺物　（S＝1／3）
図 15．2-2区土坑遺物出土状況（S＝1／3）
図 16．2-2区土坑出土遺物実測図（S＝1／3）
図17-1．2-3区遺構配置図（S＝1／200）　17-2．消失墳周溝実測図（S＝1／80）　17-3．消失墳周溝土層図（S＝1／40）
図 18．2-3区消失墳周溝埋土中出土遺物実測図1／3）
図 19．3区遺構分布図・新田原古墳群188号墳現況測量図、墳丘断面図（S＝1／200）
図 20．3区1Tr、2Tr土層図
図 21．3区北壁土層図S＝1／80
図22．西都市、祇園原地区遺跡出土土器のK2O-CaO分布図及びRb2O-SrO分布
図 23．新田原古墳群200号墳現況測量図・墳丘断面図 S＝1／200
図 24．188号墳と200号墳の墳丘断面比較図S＝1／20

図版目次

巻頭　①調査区全景（南から）　②調査区全景（東から）

図版1　①調査区と新田原古墳群祇園原支群（西から）　②2区全景　③2-3区消失墳周溝

図版2　①3区遺構検出状況　②同上　③1区溝状遺構　④溝状遺構掘削状況　⑤溝状遺構土層　⑥1区基本土層

図版3　①2区包含層検出状況　②2区撹乱溝掘削後　③2区A層掘削後　④B層掘削後⑤A-B間土層⑥2-1区基本層序　⑦2-2区基本層序　⑧2-2区土器集積土坑　⑨2-2区土坑掘削後

図版4　①2-2区基本層序2　②2-3区消失墳周溝検出状況　③2-3区消失墳周溝、土坑掘削状況　④消失墳周溝土層図　⑤3区遺構検出状況　⑥188号墳周溝検出状況と撹乱　⑦同上　⑧周溝掘削後

図版5　①2区A層出土Ⅰ-1類土器1　②2区A層出土Ⅰ-1類土器2　③2区A層出土Ⅰ-1類土器3　④2区A層出土Ⅰ-2類土器1　⑤2区A層出土Ⅰ-2類土器2　⑥2区A層出土Ⅰ-2類土器3

図版6　①2区A層出土Ⅰ-2類土器4　②2区A層出土Ⅱ類土器1　③2区A層出土Ⅱ類土器2　④2区A層出土Ⅱ類土器3　⑤2区B層出土Ⅰ-1類土器　⑥2区B層出土Ⅰ-2類土器1

図版7　①2区B層出土Ⅰ-2類土器　②2区B層出土Ⅰ-2類土器　③2区B層出土Ⅱ類土器　④B層出土Ⅱ類土器2　⑤2区B層出土Ⅱ類土器3　⑥2区B層出土Ⅱ類土器4　⑦2区A層出土遺物

図版8　①2区B層出土石器・剥片　②2区A層出土敲石　③2区A層出土剥片　④2-3区消失墳周溝出土須恵器　⑤2-3区消失墳出土須恵器

図版9　①2-2区土坑出土弥生土　②2-2区土坑出土弥生土器　③2-2区土坑出土弥生土器　④2-2区土坑出土弥生土器　⑤2-2区土坑出土弥生土器（底部）⑥2-2区土坑出土弥生土器　⑦2-3区土坑出土弥生土器

表目次

表1　包含層出土縄文土器観察表

表2　包含層出土石器観察表

表3　祇園原地区遺跡2－2区土坑出土弥生土器観察表

表4　西都市、祇園原地区遺跡における蛍光X線分析結果

第Ⅰ章　序　説

第1節　調査に至る経緯

祇園原地区遺跡の発掘調査については、県営一般農道整備事業に伴い実施したものであり、平成15年度のみの事業である。内容は現在、簡易舗装で使用されている農道をアスファルト舗装する道路改良工事で、工事区域に隣接して祇園原古墳群が所在し、周辺地での埋蔵文化財調査例[1]が多くあるため、事業主である児湯農林振興局と協議した結果、遺構・遺物が出土した場合の現状保存が困難であると判断し、本調査を実施した。

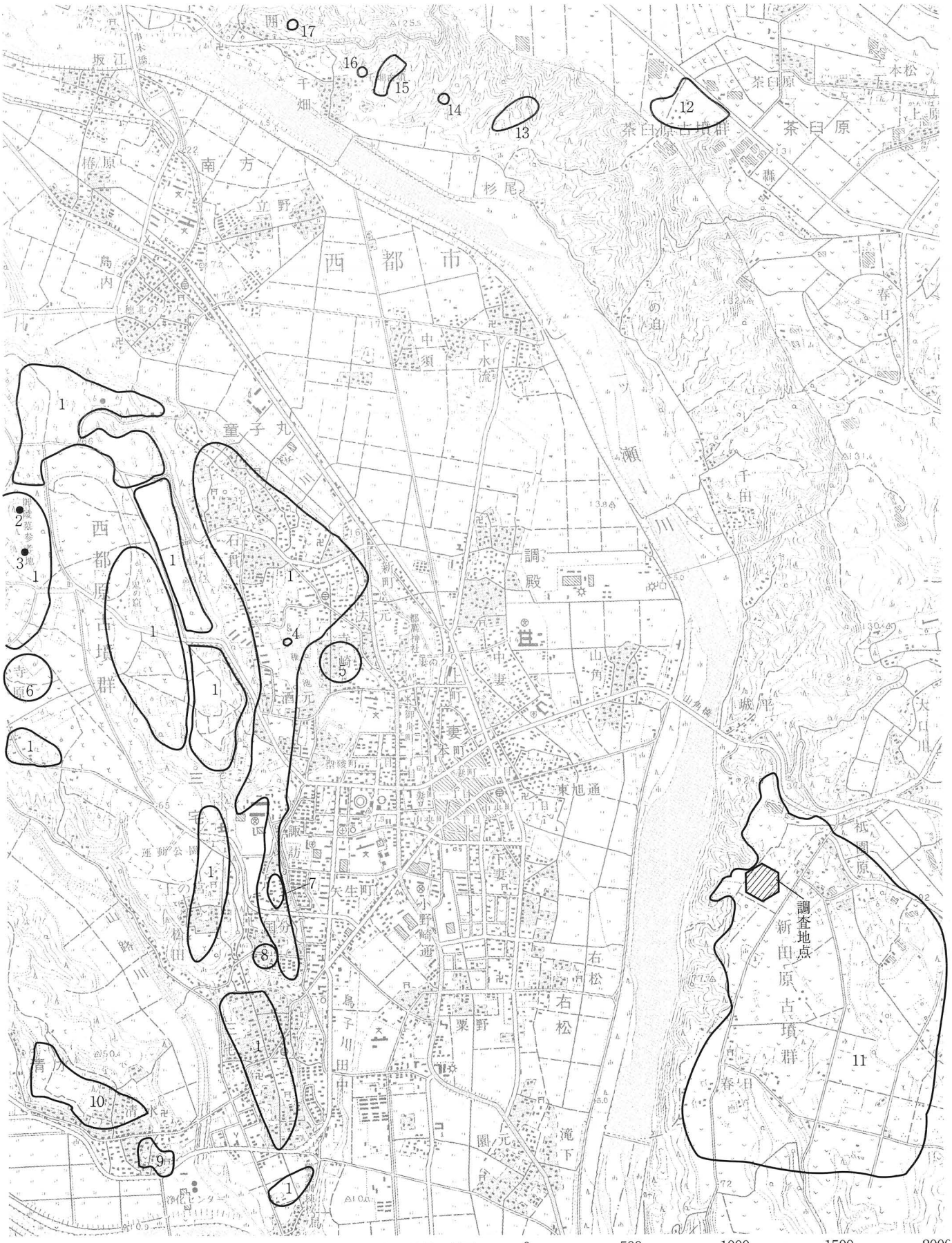
調査対象である１号路線は、畑地の進入路や建設業者の資材置き場の進入路をかねており、その通路を確保しながら調査を進める必要が生じ、そのため路線を３区に分け調査した。(図4)

1宮崎県教育委員会　編（1996)『祇園原地区遺跡－県営農村基盤整備パイロット事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』
有馬義人編（2000)『町内遺跡16』新富町文化財調査報告書第29集
有馬義人編（2001)『町内遺跡17』新富町文化財調査報告書第31集
柳田宏一・加藤学　編（2003)『祇園原遺跡・春日地区遺跡第２地点－県道木城西都線１時間構想道路整備事業（春日工区）に伴う埋蔵文化財調査報告書－』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第73集

第2節　調査の体制

事業主体	宮崎県児湯農林振興局 農地整備課 農地整備係	
調査主体	教 育 長	黒木　康郎（現任）
	文化課長	森　　康雄
	同　補佐	村岡　満徳
	同　係長	蓑方　政幾
	同　主事	鹿嶋　修一
	同　主事	筌瀬　明宏
調査担当	同　主事	津曲　大祐
調査指導	日高　正晴（西都原古墳研究所長）　小田富士雄（福岡大学人文学部教授）	
発掘作業	緒方タケ子、廻田　　勉、廻田　和子、黒木トシ子、疋田はる子	
整理作業	中原昭美、長谷川明美	
来 訪 者	有馬　義人、樋渡将太郎（新富町教育委員会)、 今塩屋毅行（宮崎県埋蔵文化財センター）	

以上の方々に貴重なご助言ご指導を賜った。(敬省略)



1、西都原古墳群　2、男狭穂塚　3、女狭穂塚　4、堂ヶ嶋第二遺跡
5、寺崎遺跡　6、寺原遺跡　7、国分遺跡　8、日向国分寺跡
9、清水西原古墳群　10、清水遺跡　11、**祇園原地区遺跡**
12、茶臼原古墳群　13、杉尾横穴墓、14、松船横穴墓　15、千畑横穴墓群
16、千畑古墳　17、囲横穴墓

図１　調査区周辺の古墳群と主要遺跡

図２　調査区位置図　S＝1：10,000

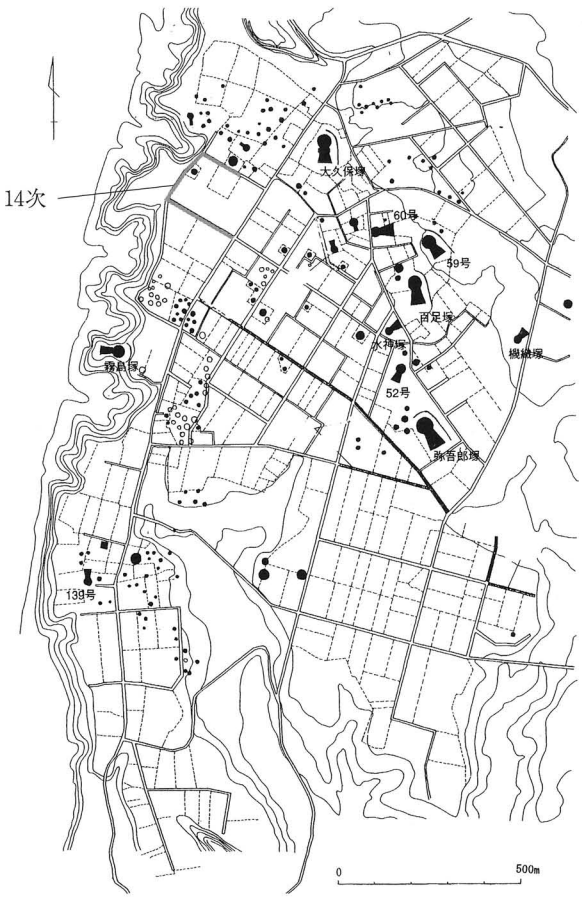


図３　調査区と新田原古墳群祇園原支群との位置関係

前掲　有馬義人編（2000年）を転載（一部改変）

S＝1：20,000

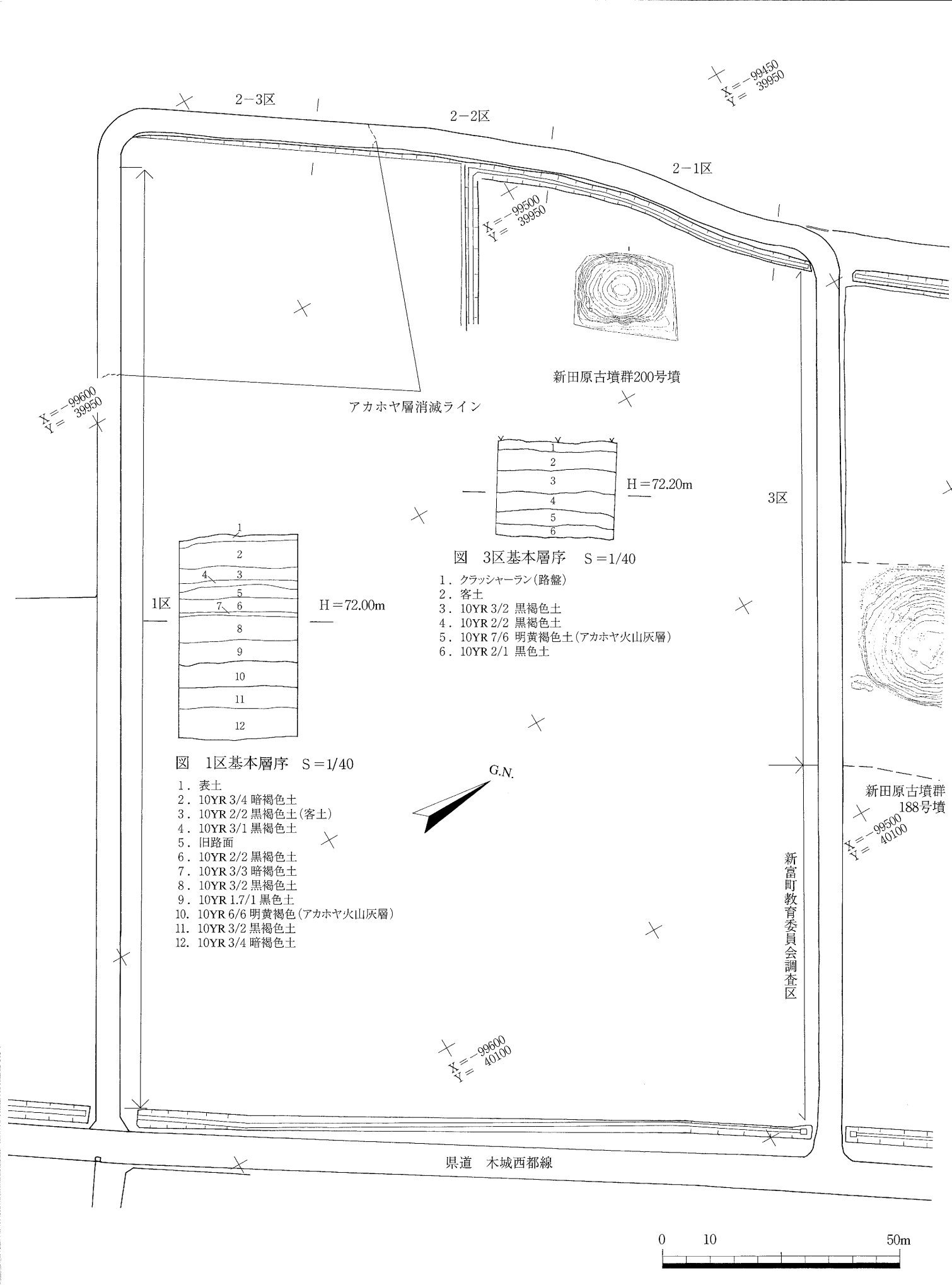


図　3区基本層序　S＝1/40

1．クラッシャーラン（路盤）
2．客土
3．10YR 3/2 黒褐色土
4．10YR 2/2 黒褐色土
5．10YR 7/6 明黄褐色土（アカホヤ火山灰層）
6．10YR 2/1 黒色土

図　1区基本層序　S＝1/40

1．表土
2．10YR 3/4 暗褐色土
3．10YR 2/2 黒褐色土（客土）
4．10YR 3/1 黒褐色土
5．旧路面
6．10YR 2/2 黒褐色土
7．10YR 3/3 暗褐色土
8．10YR 3/2 黒褐色土
9．10YR 1.7/1 黒色土
10．10YR 6/6 明黄褐色（アカホヤ火山灰層）
11．10YR 3/2 黒褐色土
12．10YR 3/4 暗褐色土

図4　調査区設定図

S＝1：1000

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第1節　立地

祇園原地区遺跡は、宮崎県西都市の東南部に位置する。現在の西都市街地からは直線距離にして約2kmである。

九州山地から東に伸びる丘陵が一ツ瀬川により浸食され、流域に沿い沖積平野（現在の西都市街地）を形成し、その平野を挟んで洪積台地が伸びる。一ツ瀬川をはさんで東側（左岸）が祇園原台地で西側が国特別史跡西都原古墳群の広がる西都原台地である。

このように当地域の地形は九州山地から伸びる丘陵が、河川の浸食により形成された沖積平野と台地からなり、その台地上や縁辺に遺跡が集中するといった特徴がある。

第2節　歴史的環境

古墳時代～古代にかけて日向国の中心地であった西都市街地からは離れて立地するが、祇園原台地にも台地上を中心に縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が所在する。

主要な遺跡を概観すると、まず台地上の東西1.5km、南北1.5kmの範囲に広がる国指定史跡・新田原古墳群の一支群である祇園原古墳群がある。有馬義人編（2002）によると総数205基（前方後円墳13、方墳1、円墳191）、現存数156基（前方後円墳13、方墳1、円墳142）で、築造時期は集成編年4期～10期（4世紀後半～6世紀代）に置かれている。平成9年度から新富町教育委員会により発掘調査が行われ、現在も百足塚古墳の発掘調査が継続しており、次第にその内容が明らかにされつつある。周辺には地下式横穴墓群、横穴墓群が所在する。近年の祇園原地区周辺の調査例は前掲註1に挙げた。それらを概観すると、宮崎県教育委員会編（1996）では、ほ場整備に際して祇園原地区遺跡を発掘調査し、消失墳の周溝34基を検出し、周溝底面から竪坑が掘り込まれ墳丘下に地下式横穴墓が築造される例や馬埋葬土壙、住居跡等多くの遺構が発見された。

有馬編（2000）では、県営一般農道整備事業に伴い祇園原地区遺跡を調査し、縄文時代早期の集石遺構や弥生時代中期～古墳時代前期の住居跡、消失墳の周溝、馬埋葬土壙等を検出している。有馬編（2001）では祇園原横穴墓群と消失墳の周溝や路線に隣接する古墳の周溝が検出されている。柳田・加藤編（2003）では、今回の調査区に近い県道拡幅部分を調査しており、遺物包含層を検出し、縄文早期～晩期の土器片、弥生土器片、石器、須恵器、土師器、近世陶磁器が出土した。特に調査区の南側で、5世紀後半代の須恵器が集中して出土している。その出土状況から、開発等で消失した古墳の周溝である可能性を指摘している。

これらの調査例からいえることは縄文時代～古墳時代を通して遺構、遺物が出土し、遺物包含層も堆積する複合遺跡であることだ。狭範囲の調査区からでも多く情報が得られることが実証されている。今後の調査においても周辺に所在する遺跡との空間的つながりを各時期において意識しながら進めていく必要がある。

今回の調査区はその台地の西端に位置する。近辺に、国指定史跡・新田原古墳群188号墳と200号墳があり、先述の調査例において縄文時代の遺物包含層や地下式横穴墓、馬埋葬土壙、消失墳の周溝等が確認されているため、それらの複合した遺跡群として評価し、調査に臨んだ。

第Ⅲ章　　祇園原地区遺跡の調査

第1節　平成15年度調査区の設定と概要

平成15年度の工事予定路線は１号路線が新田原古墳群中に通るため試掘調査は行わず工事区間内を本調査した。１号路線を３区に分け工事区間内の路盤を全て剥ぎ、遺構を精査した。調査１区に関しては遺構、遺物とも検出しなかった。調査２区において縄文時代前期～中期を中心にした遺物包含層を検出し、また2－3区では、消失円墳の周溝を検出した。

３区においては新田原古墳群188号墳の周溝の一部と考えられる遺構を検出した。

総調査面積は2,288 m^3である。

調査は協議の結果、工事計画の路床の深さまでとした。

第２節　遺構と遺物

１．１号路線１区の遺構

Ａ．遺跡の現況

１号路線の調査前の現況は、簡易舗装の農道として使用されており、総長210ｍを測る。そのため、掘削前に墳丘などの目に見える遺構は残っていなかった。しかし、過去に周辺で縄文時代前期の遺物包含層や消失円墳の周溝などが発見されていたため、慎重に舗装路盤を剥ぎ、一部深く掘削し基本層序を把握し、アカホヤ層上面において遺物包含層の有無を確認しながら調査を進めた。

Ｂ、遺構と遺物

調査区からは溝や、不整形な土坑が検出されたが遺物を伴わない。基本層序は図４の通りである。

アカホヤ層以上の層に遺物包含層はなく、客土と耕作土が主体を占める。

溝状遺構は、土層を観察すると砂粒混じりの層やシルト質の互層堆積により形成され、自然流路と考えられる。円形の土坑は掘削も浅く、埋土も耕作土が主体であることや、ビニール等の混入から、現代の芋貯蔵穴等の土坑と考えられる。

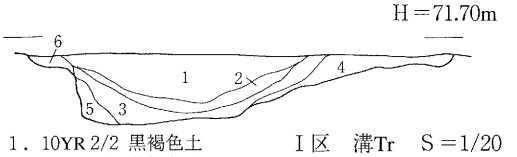
遺物は図化し得るものはないが、陶磁器の破片が耕作土に混じって出土した。

アカホヤ層から旧地形を推測すると調査起点の県道木城西都線側から西（一ツ瀬川）に向かって次第に地形は隆起して丘陵をなしていたと考えられる。起点から約156ｍの地点でアカホヤ火山灰層は消えており（図4）、周辺住民の話でも丘陵を削平して整地したということであるからそのために土層の在り方が変化したものである。

2、１号路線２区の遺構（図6、7）

Ａ．遺跡の現況

現況は1区と同じく2区も簡易舗装の農道で総長約145ｍを測る。調査区に隣接して新田原古墳群第200号墳がある。路盤を剥ぎ、基本層序確認の後、遺物包含層の有無に注意して遺構を精査した。



1．10YR 2/2 黒褐色土　　Ⅰ区　溝Tr　S＝1/20
2．10YR 5/6 黄褐色土
3．10YR 2/1 黒色土
4．10YR 3/2 黒褐色土
5．10YR 2/2 黒褐色土
6．10YR 3/3 暗褐色土

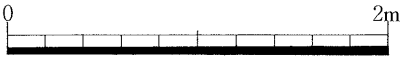


図５　溝土層　　S＝1/40

B．遺構と遺物

2区は今回の調査区の中で最も遺物、遺構が集中して出土した。調査は北東側を起点にして始めたため、1区の終点に向かって掘削、検出したことになる。調査区が縦長であるため、50mで区切り、2区を3つに分けて調査した。それぞれ2－1区、2－2区、2－3区とする。

主な遺構、遺物は縄文前期～近世にかけての遺物包含層（A層）と縄文前期～中期前半の遺物包含層（B層）と弥生後期前半の土器片が集積した土坑、消失円墳の周溝、弥生後期前半の土坑が検出できた。また、自然流路と考えられる溝状遺構や現代の芋貯蔵穴と考えられる遺構を検出した。

全体的にA層上には耕作土、客土が堆積しており、耕運機による撹乱が多くある。また、調査区に併行して側溝が敷設されており、その際の掘削などで撹乱の層が主体を占める。

その中で基本層序を観察すると大きく2つの様相を示す。

1区で確認したとおり、調査区終点部（南西側）に向かって地形は次第に隆起しており、調査区起点から約90ｍの地点でアカホヤ火山灰層は消える。図4で示したラインがアカホヤ火山灰層の有無であり、旧地形の削平、整地により生じたものである。

遺物包含層と遺構は、路盤をはぎ、客土と耕作土（図7－3、1、2、3層）と考えられる層の下で確認できた。

遺物包含層は2つの層に分層できた（図7－2）。いずれの層も遺物の主体を占めるのは縄文土器である。包含層は検出面から15cm～20cmで薄く形成されている。

A層：縄文時代前期～現代までの遺物が出土する層。黒色土で形成され、耕作などで撹乱を受ける。土層（図7－2）では3、4層に対応する。

B層：縄文時代前期～中期の包含層で、他の時期の遺物は混入しない。部分的に樹根の撹乱を受ける。A層の下に形成されている。遺構は伴わない。黒褐色層で、アカホヤ火山灰塊が多く混じる。土層（図7－2）では5、6層に対応する。2－1区、2－3区では見られない。

ここではまず、2区で出土した縄文土器を次の3類に大分類し、文様により細分類し、以降の著述においてはこの分類に従う。

Ⅰ－1類

短沈線と列点文により文様を構成する土器の破片で、口縁部に刺突列点文を施し、沈線による文様帯の区画があり、その中に短沈線による幾何学系の文様を施すもの。特に滑石に由来すると考えられる器面に蝋を塗ったような脂質の感触がある。

Ⅰ－2類

施文はⅠ類と同じだが、施文具に差があるものも有り、胎土に滑石の混入がないか少なく、脂質の感触がないもの。

Ⅰ類土器は文様により12類に細分した。

A類　口縁に刺突列点文＋横位短沈線を施し、内面端部に横位短沈線を施文する。

a類　口縁に刺突列点文の下に横位短沈線の区画を挟まず文様帯を施し、内面にも短沈線を施文するもの。

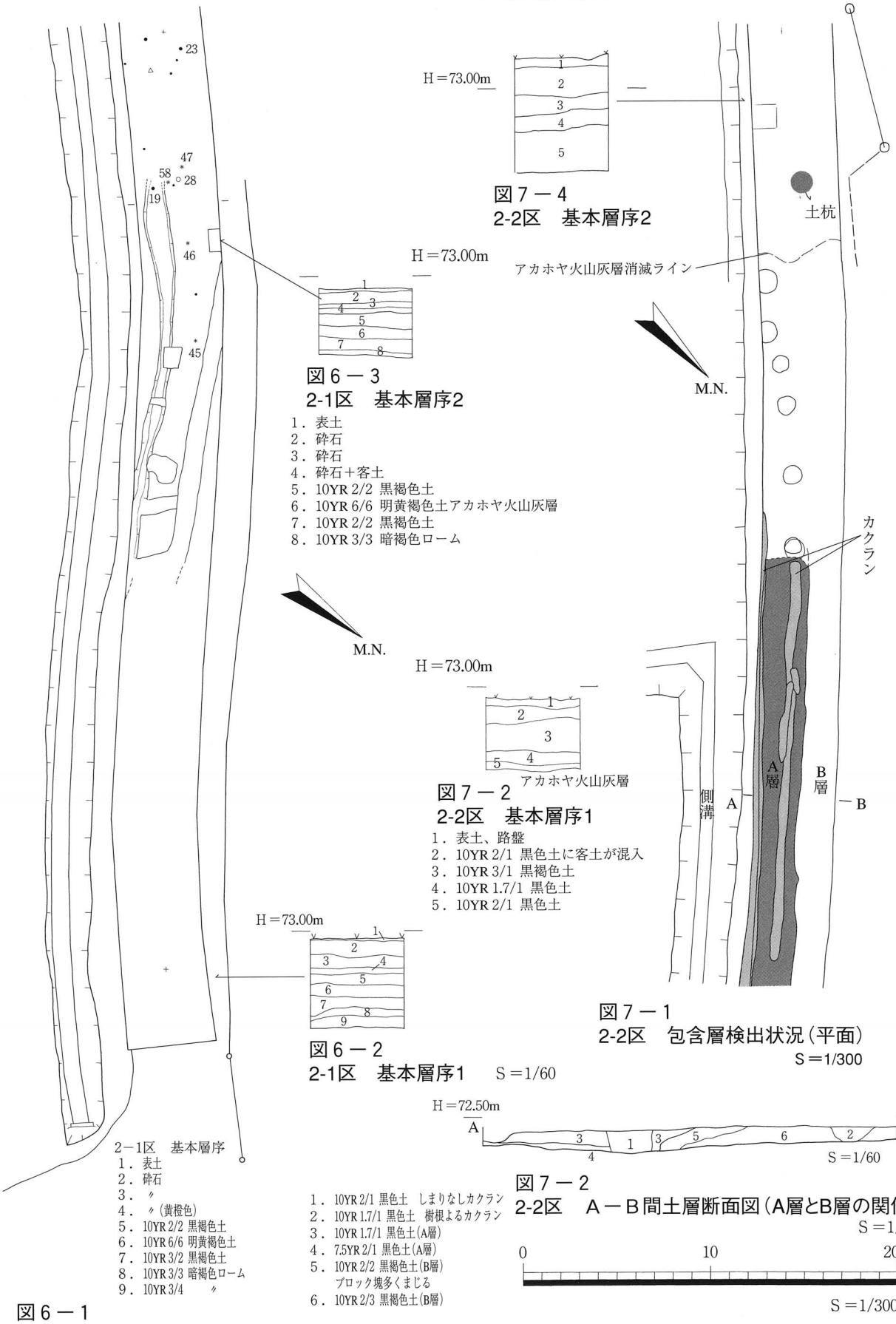


図７－４
2-2区　基本層序2

図７－１
2-2区　包含層検出状況（平面）
S＝1/300

図７－２
2-2区　基本層序1
1．表土、路盤
2．10YR 2/1 黒色土に客土が混入
3．10YR 3/1 黒褐色土
4．10YR 1.7/1 黒色土
5．10YR 2/1 黒色土

図７－２
2-2区　Ａ－Ｂ間土層断面図（A層とB層の関係）
S＝1/60

1．10YR 2/1 黒色土　しまりなしカクラン
2．10YR 1.7/1 黒色土　樹根よるカクラン
3．10YR 1.7/1 黒色土(A層)
4．7.5YR 2/1 黒色土(A層)
5．10YR 2/2 黒褐色土(B層)
　ブロック塊多くまじる
6．10YR 2/3 黒褐色土(B層)

図６－３
2-1区　基本層序2
1．表土
2．砕石
3．砕石
4．砕石＋客土
5．10YR 2/2 黒褐色土
6．10YR 6/6 明黄褐色土アカホヤ火山灰層
7．10YR 2/2 黒褐色土
8．10YR 3/3 暗褐色ローム

図６－２
2-1区　基本層序1　S＝1/60

2－1区　基本層序
1．表土
2．砕石
3．〃
4．〃（黄橙色）
5．10YR 2/2 黒褐色土
6．10YR 6/6 明黄褐色土
7．10YR 3/2 黒褐色土
8．10YR 3/3 暗褐色ローム
9．10YR 3/4　〃

図６－１
2-1区　遺物出土状況　S＝1/300

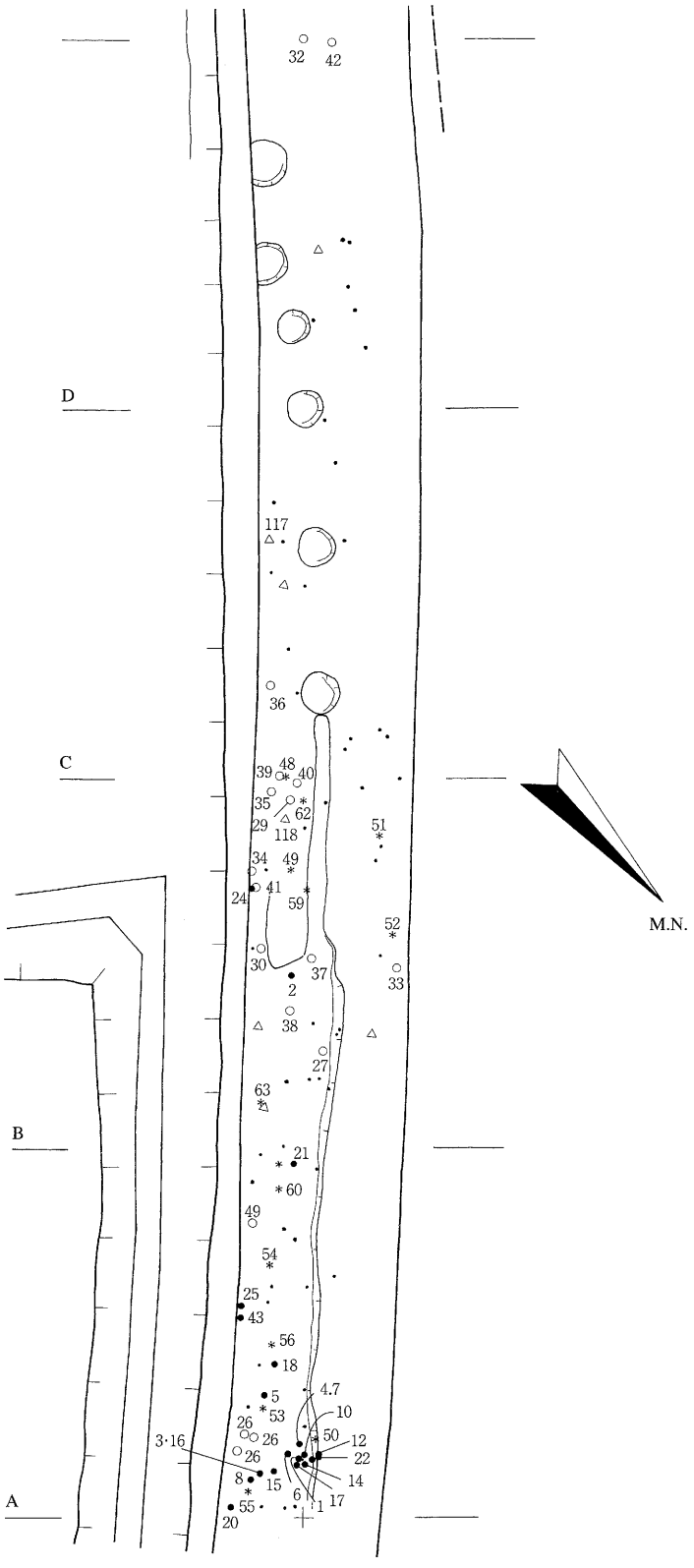


図８　2-2区　A層遺物出土状況　S＝1/200

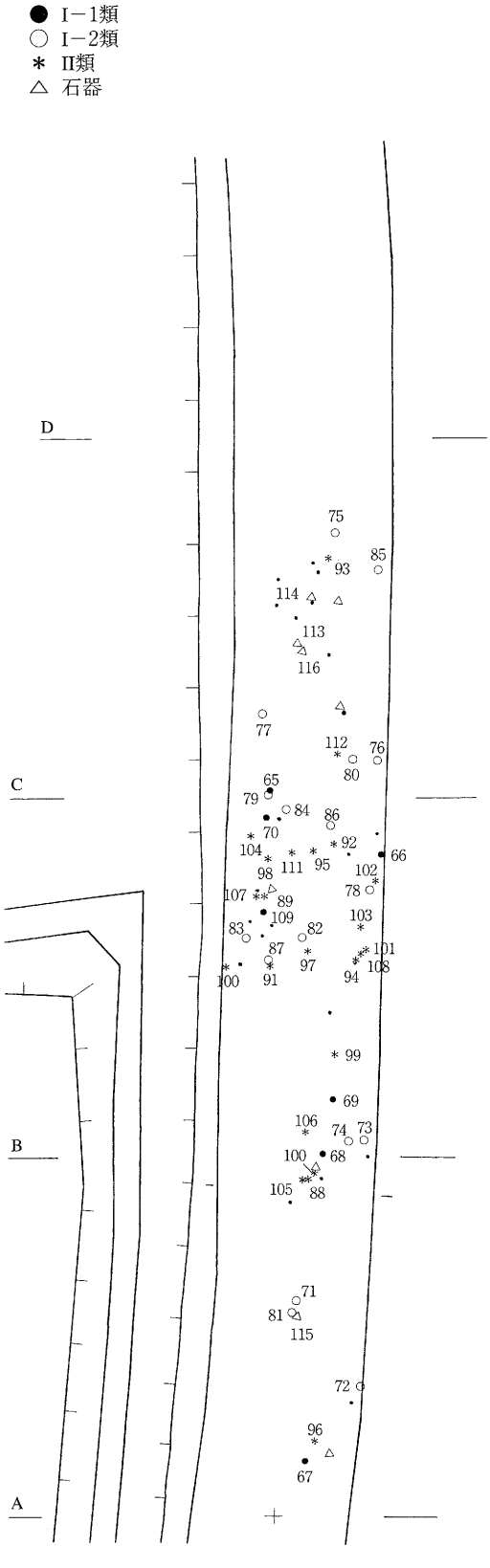
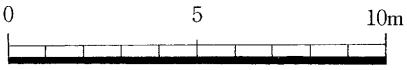


図９　2-2区　B層遺物出土状況　S＝1/200



Ｂ類　刺突列点文で口縁の内外面に施文するもの。
Ｃ類　口唇部に刻目を施すか施文せず、横位短沈線で口縁部を施文するもの。
Ｄ類　明瞭な横位の短沈線で施文するもの。
ｄ類　不明瞭な横位短沈線で施文するもの。
Ｅ類　斜短沈線で三角形の文様を構成し、その三角形の区画内を横短沈線で充填するものを組合わせ施文する。施文方法には斜沈線内にできた三角形の区画内を横位短沈線で埋めるものと、横位短沈線の上から斜沈線を施し、三角形の文様を構成するものがあり、２種は混用して用いられる。
Ｆ類　横位短沈線にＵ字形の沈線で区画し、中を縦位の短沈線で充填し施文するもの。
Ｇ類　「ハ」の字状の短沈線を縦位に連続させ施文するもの。
Ｈ類　短沈線で四角形の文様を構成するもの。
Ｉ類　縦位曲線と横位沈線で文様を施文するもの。
Ｊ類　横位短沈線を挟んで上下に縦位、横位短沈線で文様を施文するもの。

Ⅱ類

Ⅱ類の文様の特徴は蒲鉾型の突帯を横位に付し装飾をするものと退化した微隆起突帯を付すものがある。器面には条痕がのこるものと残らないものがある。Ⅰ－1類に見られるような脂感触はない。
Ａ－１類　断面が蒲鉾型状の太めの突帯を横位に付すもの。
Ａ－２類　明確な突帯を横位に付すもの。
Ａ－３類　明確な突帯を多数平行させて付すもの。
ａ類　微隆起突帯を横位に付すもの。地文に条痕が残るものと残らないものがある。
Ｂ類　曲線の突帯を付すもの。
ｂ－１類　曲線の微隆起突帯を付すもの。
ｂ－２類　縦位と横位の微隆起突帯を付すもの。
Ｃ類　外面をナデによる調整によるもの。
Ｄ類　横位の条痕のみのもの。
ｄ類　縦位の条痕のみのもの。

Ⅲ類

１点のみの出土だが、色調、調整においてⅠ、Ⅱ類に当てはまらないもので、内外面は条痕の後ミガキ系の調整を施す。突帯、沈線等の施文はない。

２－１区：3区画のなかで標高が最も低く、撹乱も多い。基本層序は図６－３に示すとおりで、5層がＡ層に対応し、Ｂ層の堆積はない。樹根の撹乱が多い。

１．Ａ層出土遺物

Ａ層からは、縄文土器片、石器剥片、瓦片、陶磁器片、様々な時期の遺物が16点出土したが主体を占めるのは縄文土器の破片である。２－１区の遺物包含層はＡ層のみであった。

19はⅠ－１Ｅ類で、内面は摩滅が著しい。23、28はⅠ－１ｄ類で沈線も浅く28には斜沈線も見られる。45はⅡａ類で地文の条痕がナデにより内外面とも不明瞭である。46、47はⅡＡ類で47は

2列平行させ、地文の条痕は不明瞭である。58はⅡD類である。

2－2区：最も遺物が集中し出土した区画で、B層→A層の順に包含層が形成されていた。

1、A層出土遺物

A層からは、2－1区同様縄文土器片、石器、剥片、須恵器片、鉄釘、陶磁器片等様々な時期の遺物が119点出土した。以下で図化したものにふれる。

1,2は縄文土器Ⅰ－1C類で2は口縁端部が摩滅している。内面に施文はない。3,4はⅠ－1B類でいずれも小破片であるが3は口縁形態が三角形を呈す。5,6はⅠ－1A類で口縁端部は欠損し、刺突列点文下の施文はE類である。7～18はⅠ－1E類である。小破片のため一括して捉えた。9に見られるように2段以上組合わせて文様帯を構成する胴部の破片である。内面はナデもしくは摩滅が著しい。20はⅠ－1F類、21はⅠ－1G類である。22はⅠ－1D類であるが小破片のため横位短沈線のみで文様帯を構成するものかE類の一部なのかは判別しにくい。24、25はⅠ－1d類でやや不定方向の横位短沈線で底部付近か。

26はⅠ－2A類である。口唇部にも刺突列点文が施される。内面はナデの痕跡がみえる。27、29～39、43はⅠ－2E類である。特に32は沈線も線刻状に浅く雑な感を受け、31ともに内面には条痕が明瞭に残る。40～42はⅠ－2D類である。44はⅠ－2G類である。

48～50はⅡA類で48は口縁部、外面の条痕は不明瞭で沈線条の痕跡も見える。51～53、55はⅡB類である。53は内外面とも地文の条痕は残らない。55は地文の条痕が明瞭に残り他と異質であり、曲線と横位に微隆起突帯を組合わせた文様が見られる。56はⅡA類で2本の突帯を付し、地文の条痕は残る。57はⅡA－2類で地文の条痕は残るが不明瞭である。59～61はⅡD類である。62はⅡd類、63はⅡC類である。64はⅡB－2類で地文の条痕が内外面とも明瞭に残る。

当調査区からは石器類も出土した（PL8－3）。表3にまとめてある。

- **砂岩**　117は敲石である。下端に敲打痕跡が残る。
- **頁岩**　118は敲石である。下端に敲打痕跡が残るが敲打の際に側縁が欠損する。
- **ホルンフェルス**　1点出土した。縦長剥片である。
- **チャート**　2点出土した。縦長剥片である。
- **姫島産黒耀石**　2点出土した。縦長剥片である。

また、A層からは縄文時代以降の遺物も出土した。

121は弥生土器の破片で、ミガキが施される。壷の頚部付近、122は弥生土器の底部破片である。119は鉄釘である。断面四角形を呈す。上半は現存長4.75cm最大幅0.75cmを測る。120は須恵器の甕胴部の破片である。焼成は堅緻。調整は外面が灰かぶりにより不明瞭だが擬格子目叩き、内面が当て具痕を丁寧にナデ消してある。近接して所在する新田原古墳群200号墳に伴うものか。123は肥前系陶磁器椀の破片である。7.5GY5／1緑灰色の円文を外面に描く。釉の厚さは0.1～0.2cmで灰白色を呈す。

2、B層出土遺物

B層からは縄文土器片と石器、剥片が78点出土した。以下図化したものについてふれる。

65～67はⅠ－1E類である。68はⅠ－1J類である。69、70はⅠ－1D類である。いずれも内面には条痕等の調整痕は残らず、ナデによるものと思われる。また、B層からⅠ－1類は出土数が非常に少なく、図化し得たもので6点であった。

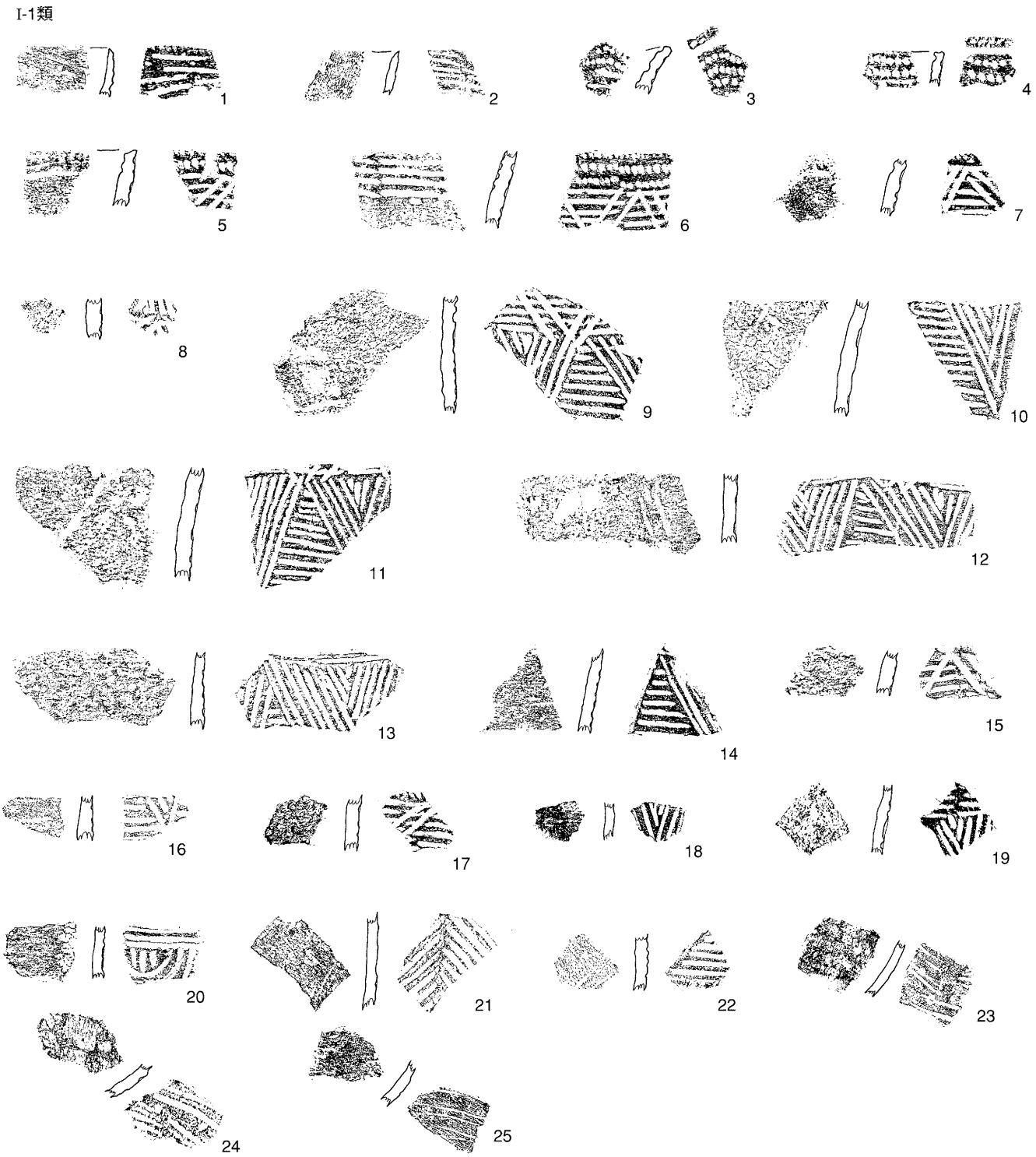


図10　2-2区　A層出土縄文土器　　S＝1/3

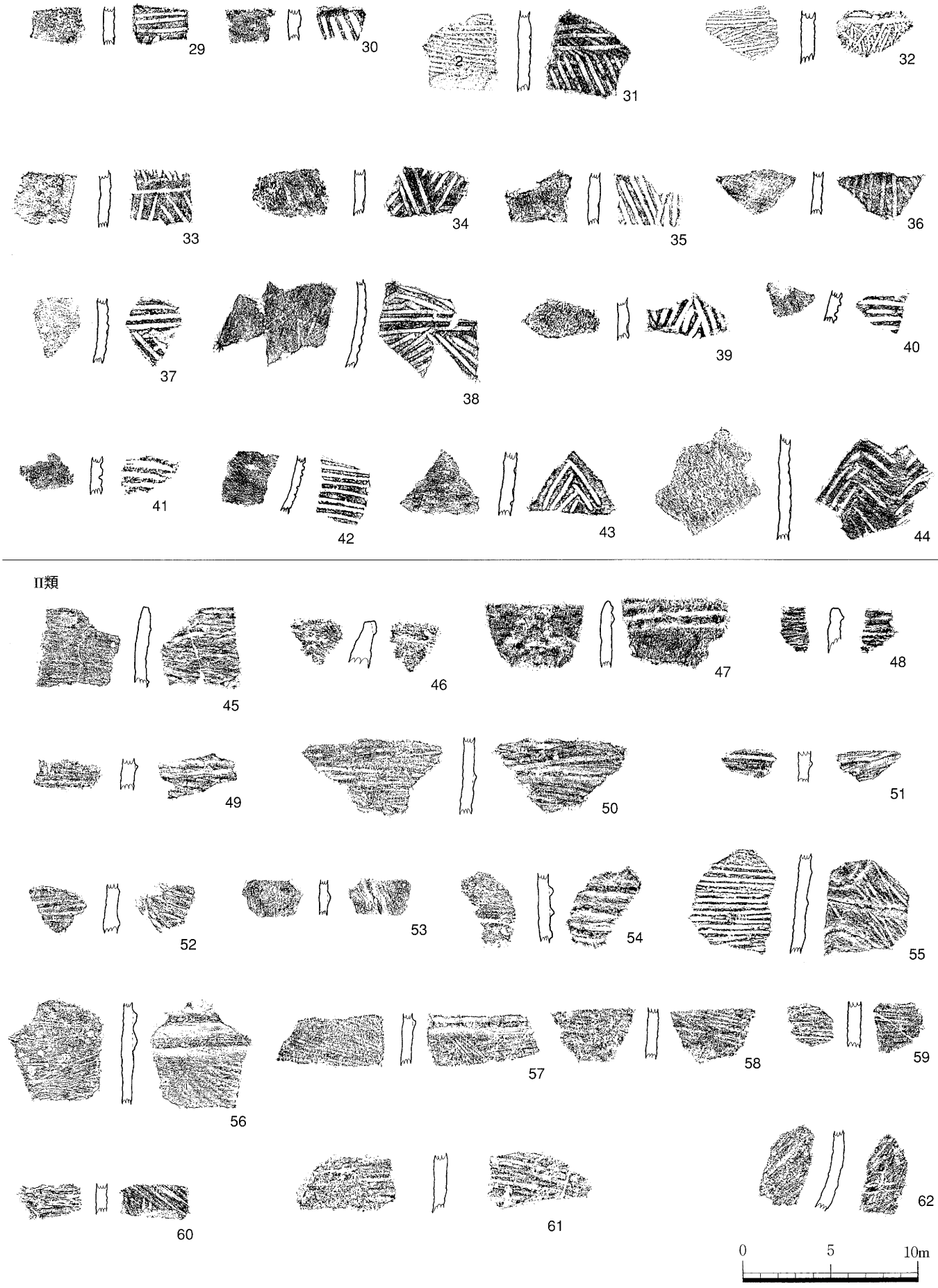
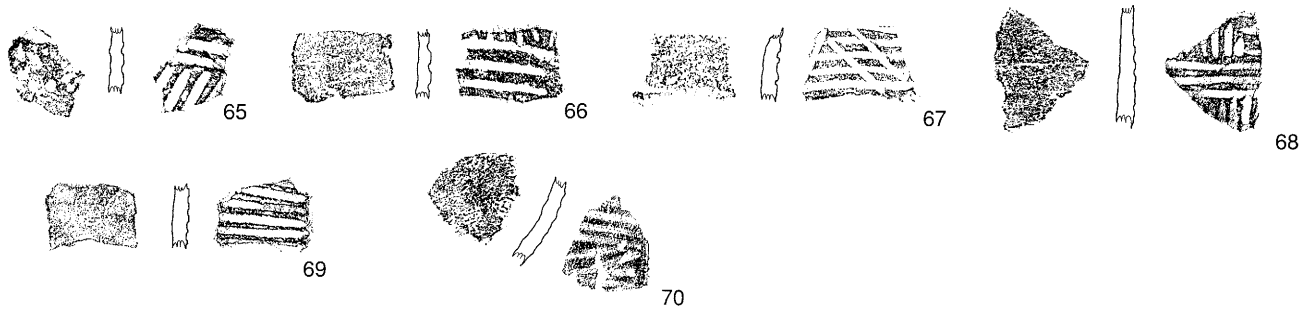
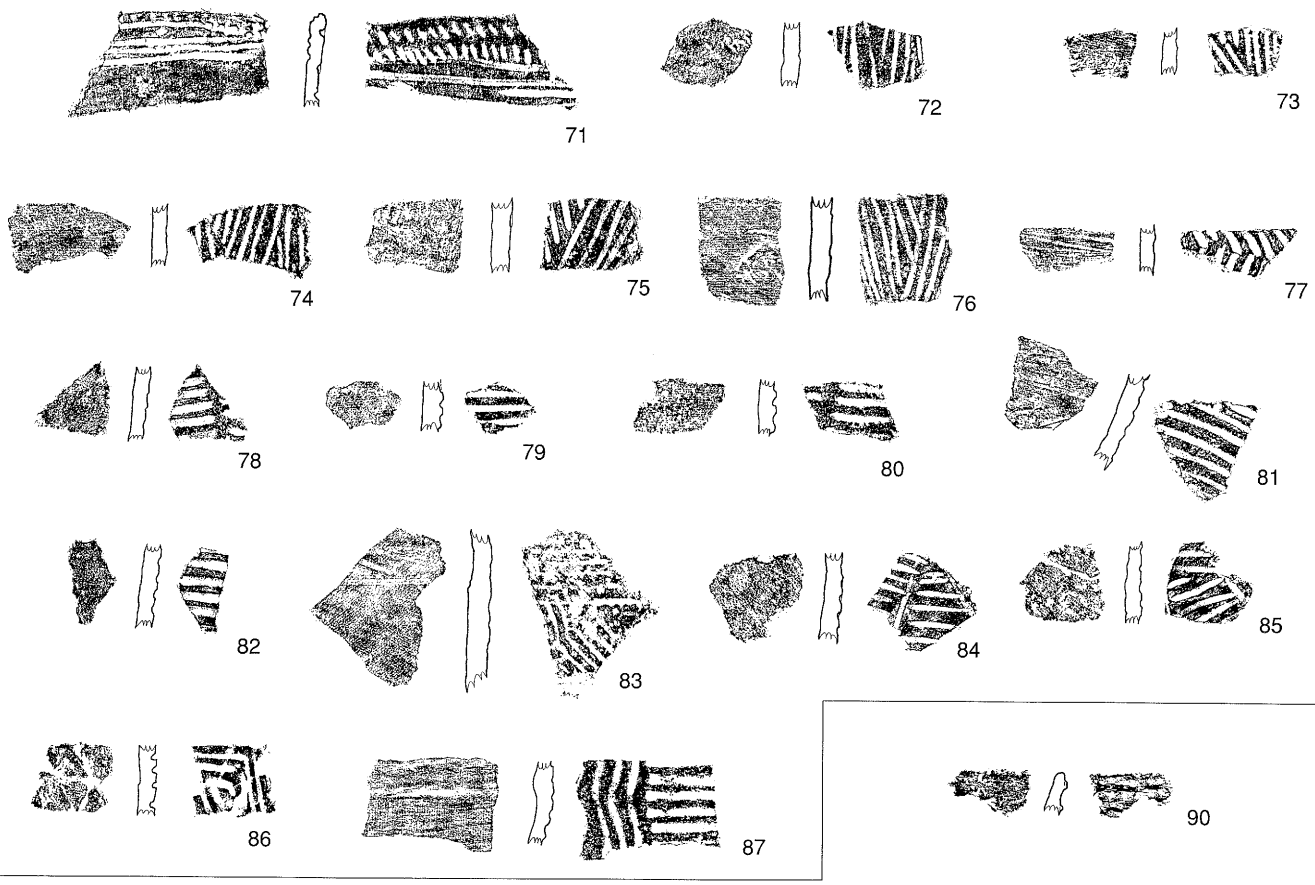


図11　2-2区　A層出土縄文土器　　S＝1/3

B層　I-1類



I-2類



II類

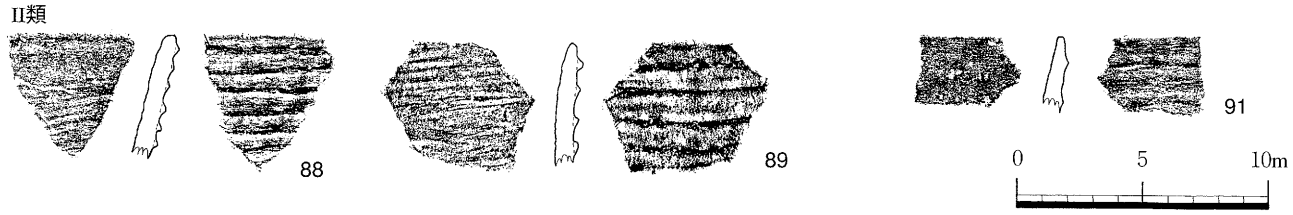


図12　2-2区　A層・B層出土縄文土器　　S＝1/3

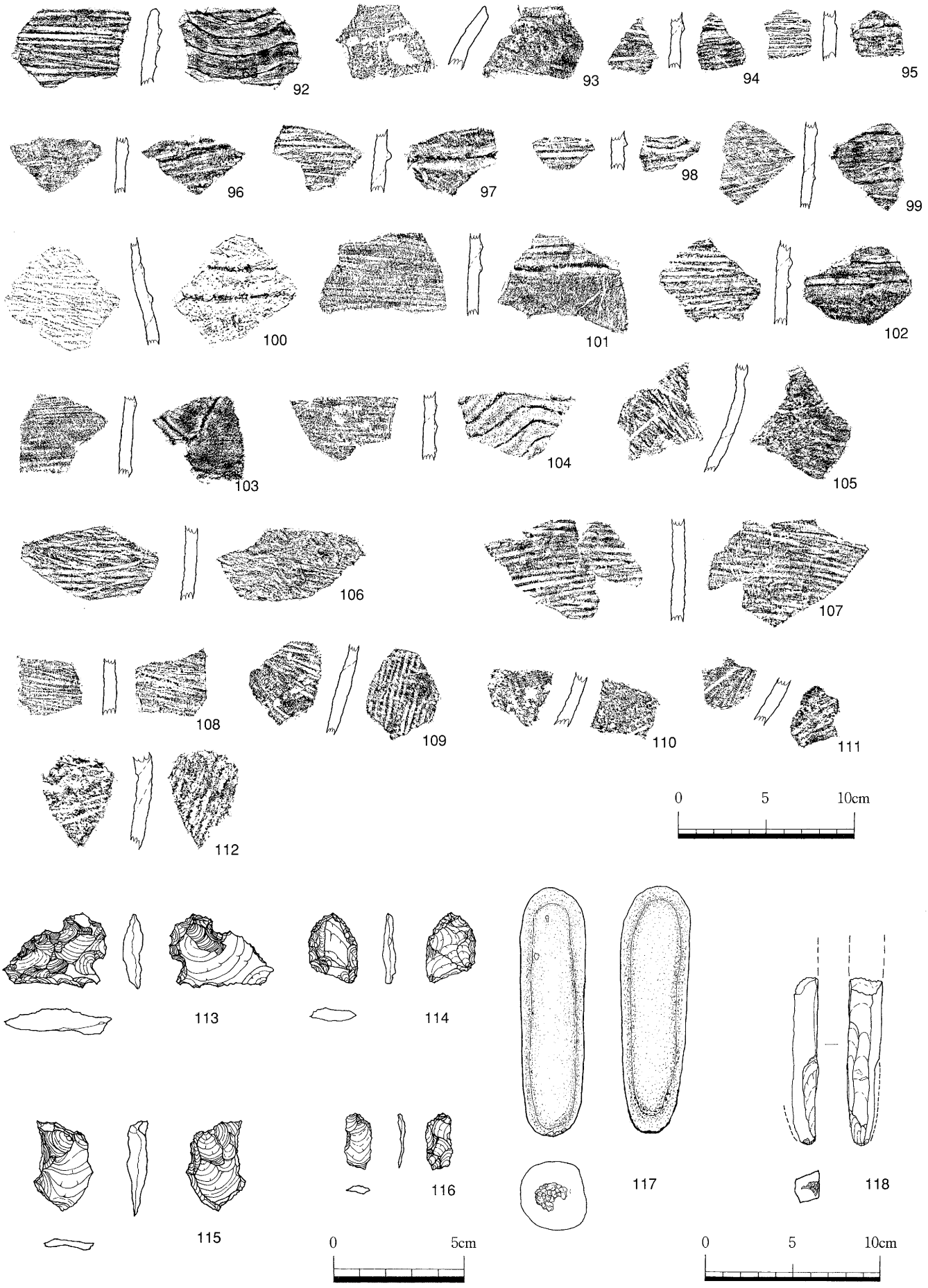


図13　2-2区　B層出土縄文土器・石器　A層出土石器　　S＝1/2(113~116)　S＝1/3

71はⅠ－2Ａ類で26に比べると施文も浅く雑な感を受ける。72～77、83～85はⅠ－2Ｅ類であるが、Ⅰ－1Ｅ類と比べると沈線が浅く、幅も狭い。73、74、77は内面に条痕が残る。78、79、80、81、82はⅠ－2Ｄ類で、81は内面に条痕が残る。86はⅠ－2Ｈ類である。87はⅠ－2Ⅰ類で、粘土帯の接合部分である。同じ沈線による施文だが、他のⅠ類の遺物と文様が異なる点が注目される。

88～112は縄文土器Ⅱ類である。　88、89はⅡＡ－3類で口縁部、内面に条痕が明瞭に残る。90、91、94、95、96、99はⅡＡ類で、90と91は口縁部、内外面とも条痕が残らない。他の外面はナデもしくはミガキ系の調整で条痕が不明瞭に残る。92、104はⅡＢ類で内面には粗い条痕が残る。

97、100、101、102はⅡＡ－2類で外面は地文の条痕が明瞭ではないが内面は粗い条痕が残る。100、102、107は2本の突帯を付す。98、103はⅡＢ類で103には曲線と横位の微隆帯が貼り付けられる。105～108はⅡＤ類である。109、111、112はⅡｄ類である。110はⅡＣ類である。

93は1点のみの出土だがⅢ類を設定した。色調が10ＹＲ7／4にぶい黄橙色であり、内外面とも条痕をミガキ系の調整で消す。

Ｂ層からは石匙と剥片も出土した。（表3、ＰＬ8－1）

・**姫島産黒耀石**　1点の石匙（113）と10点の縦長剥片が出土した。石匙は一端隅に両面から抉入状に加工を施し、偏ったつまみ部を作り出す。表面の縁辺に偏って加工し刃部を作り出している。

・**チャート**　縦長剥片が1点出土した。

・**頁　　岩**　尖頭器が1点出土した。側縁部は両面から加工を施し、外湾する。側縁部に研磨が施される。

3．土坑（図15）

2－2区からは径0.88～1.05mの楕円形プランで、検出面から深さ16cmの弥生時代後期の土器片が集積した土坑を検出した。地形の削平が大きいことから更に深い掘り方であったと考えられる。土器片のほとんどは土坑埋土中から出土した。

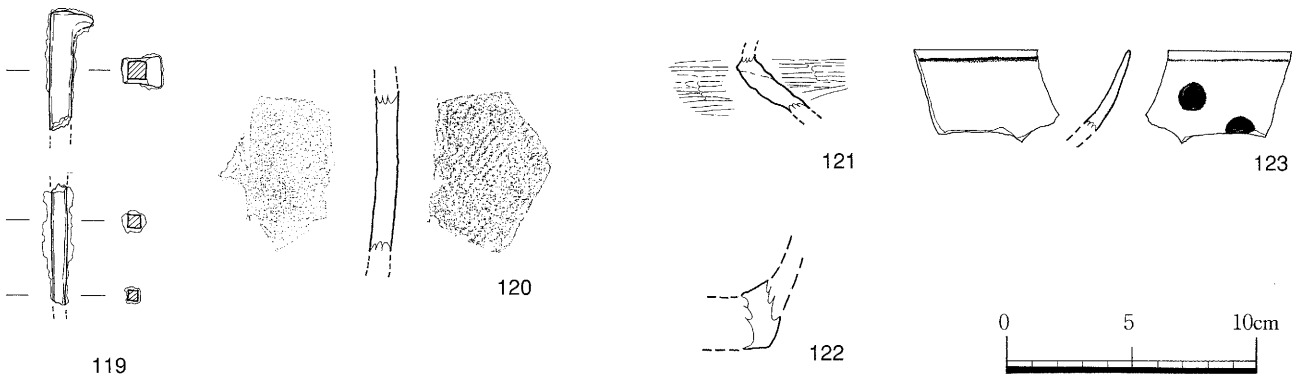


図14　2-2区　A層出土遺物　　S＝1/3

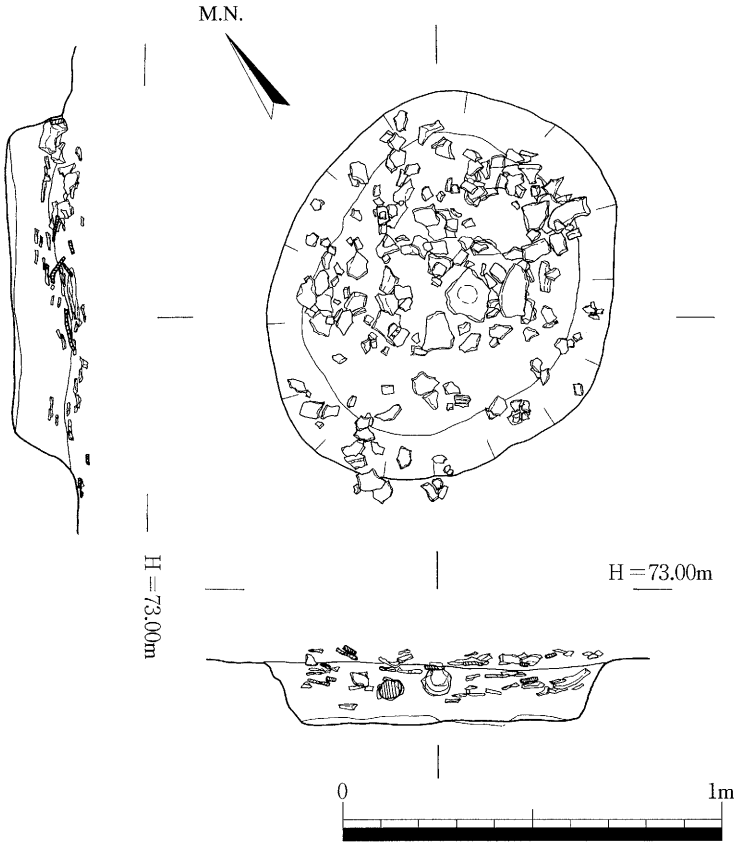


図15　2-2区　土坑遺物出土状況実測図　　S＝1/20

全て破片で土器の形を成すものは少ない。底部、口縁部の形態がわかるものから推測すると、甕が主体で、壷や祭祀用の器台、高坏、小型器種も見られる。124は甕の口縁で、端部は平坦で外面の端部の陵は鈍い。外反する部分は短い。内外面ともナデ、胎土は粗粒で色調が2.5Y5／1黄灰色を呈す。125も甕の口縁で、端部はやや窪む。内外面ともナデ調整、胎土は粗粒。126～127は甕の頚部～胴部の破片である。いずれも刻目突帯を貼り付け、突帯の上面は丁寧にナデつけるが下面は雑で、接合痕が明瞭である。126は突帯幅1.2cm、不均等な間隔で突帯に対し縦位に刻目を施す。内面にナナメハケ。127は突帯幅1.0cm、不均等な間隔と不揃で浅い刻目を斜位に施す。内外面ともナデ。128は突帯幅1.2cm均等な間隔で広い幅の刻目を斜位に施す。内外面ともヨコハケで調整し、胎土と色調から124と同一個体であろう。129は突帯幅1.4cm、不均等な間隔で浅い刻目を縦位に施す。内外面ともハケメ。130、131は壷の胴部破片で、断面三角形状の突帯を持つ。内面にハケメが施される。132は壷の頚部破片で断面三角形の突帯を持つ。外面にミガキ、内面にハケメが施される。133は壷胴部で、断面M字状の突帯を持つ。外面はミガキ、内面はナデ。134は壷の頚部～胴部で外面はミガキ、内面はナデ。135は小型器種の口縁で、円形のスカシが外面から空けられる。胎土は精良。135は壷の口縁～頚部で、口縁端部は強いナデにより窪み、端部陵は鈍い。頚部はやや垂直気味に短く立ちあがりくの字に外反する。調整は外面が口縁端部付近までハケ上げられ、ヨコナデにより口縁部はナデ消される。内面は口縁がヨコハケの後ナデ、頚部は縦にナデ、胴部にかけてもハケメを施す。胎土は精良。137～139は壷の底部で平底を呈す。137は底径（復元）7.1cm外面をミガキ、黒変があり、内面はナデ、精良な胎土。138は底径（復元）8.5cm、外面はミガキを施し精良な胎土。140は高坏の脚柱部で外面にタテハケ、内面にシボリ状のナデが施される。141は器台の脚裾部で復元径が24cm、胎土は粗粒で、内外面は摩滅のため調整不明、7.5YR7／4にぶい橙色を呈す。142～146は甕の底部で、いずれもやや上げ底気味の底部形態である。143は復元底径7.6cm内外面にハケメが施される。底部断面の観察から、底部に粘土を脚台状に貼り付けて上げ底状の底部を形成する。胎土には褐色砂粒が多く含まれる。144は復元底径6.5cm外面をハケメ、内面は単位の長いナデ、底部に指オサエの痕跡が残る。145は復元底径6.8cm、外面をヨコナデ、ミガキ、黒変あり。146は底径6.3cmを測る。

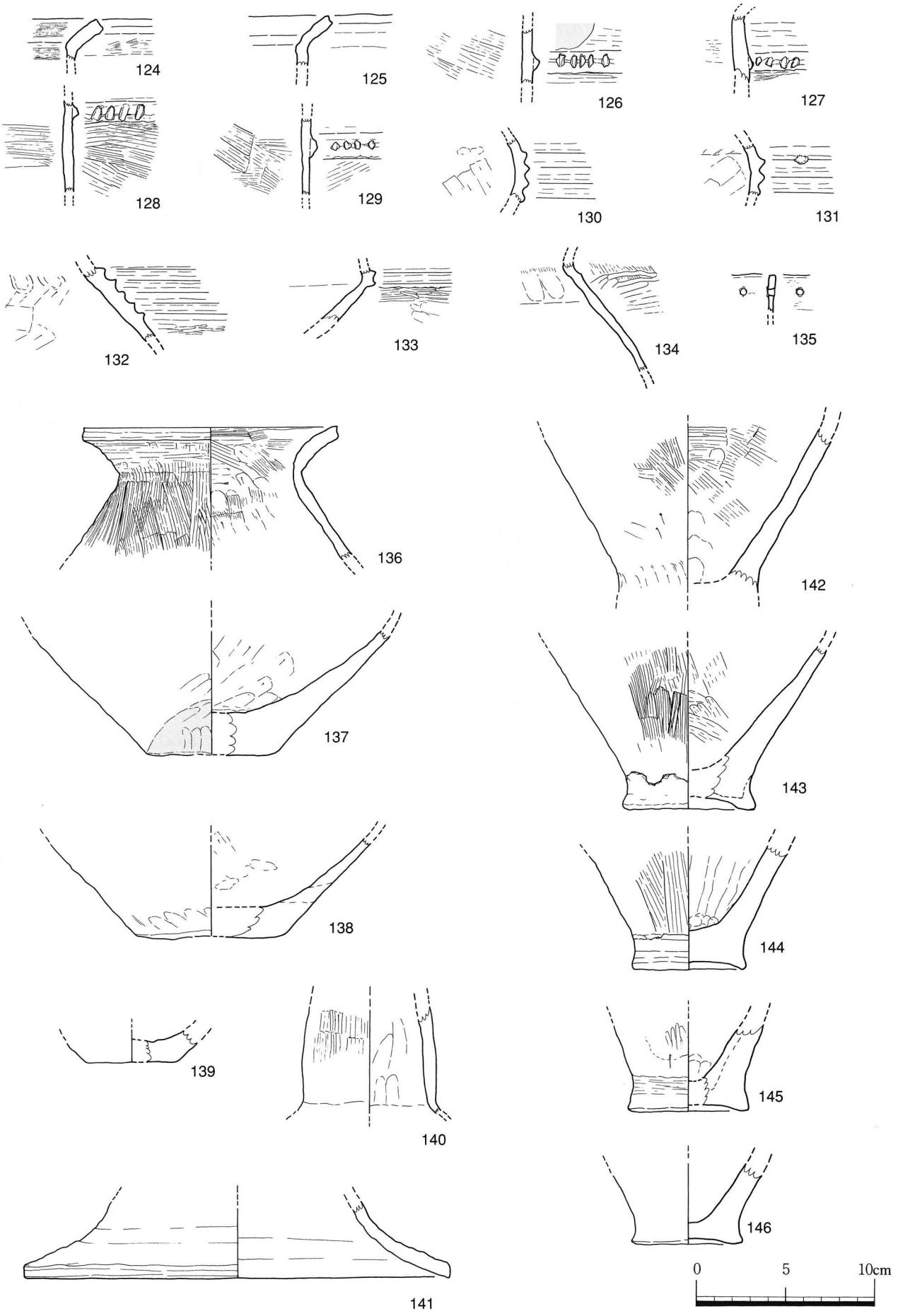
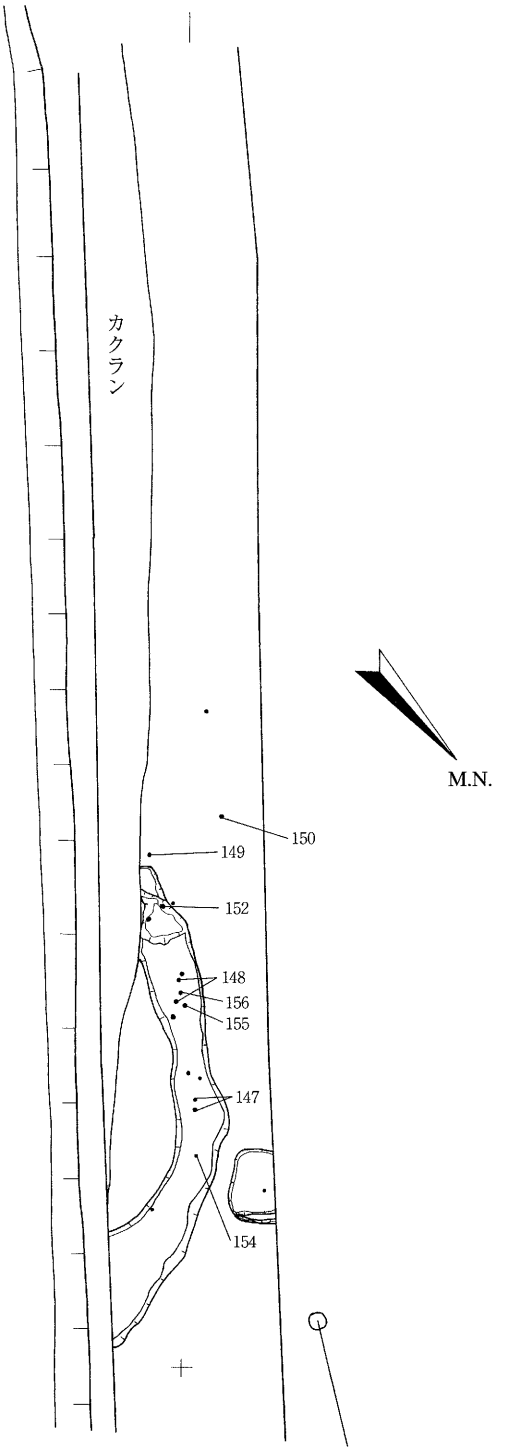


図16　2-2区　土坑出土遺物実測図　　S＝1/3



A 1．10YR 1.7/1 黒色土
2．7.5YR 2/1 黒色土

図17－1　2-3区　遺構配置図
S＝1/200

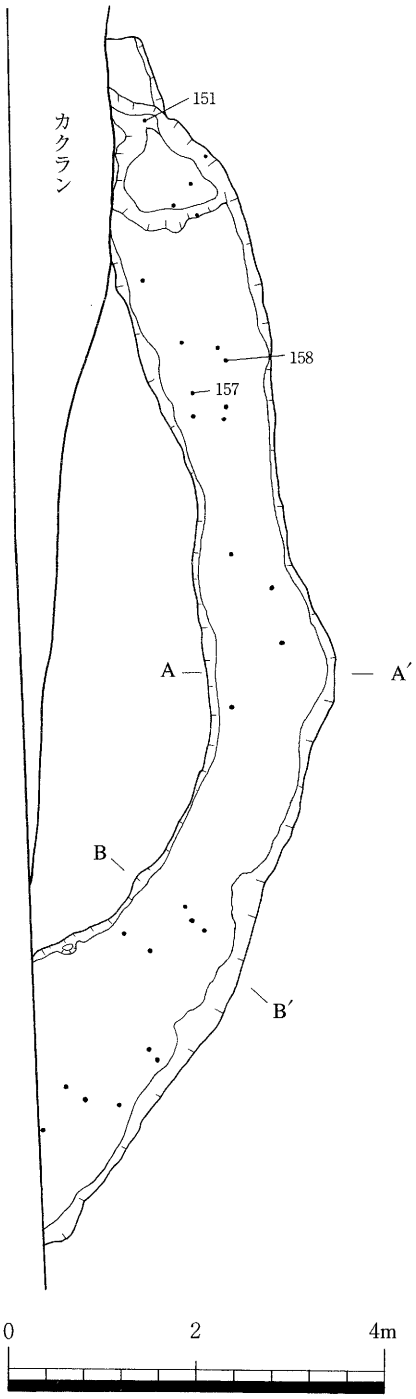
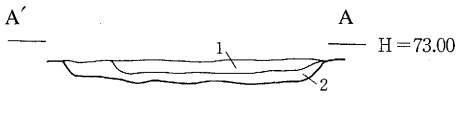
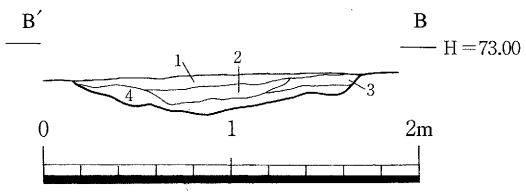


図17－2　消失墳周溝実測図　S＝1/80





B 1．10YR 1.7/1 黒色土
2．10YR 2/1 黒色土
3．10YR 2/2 黒褐色土
4．10YR 2/3 黒褐色土

図17－3　消失墳周溝土層図　S＝1/40

2－3区：旧地形が丘陵状を呈していたため最も標高の高い位置にあり、アカホヤ火山灰層は削平されており、その上層に堆積するＡ層、Ｂ層も存在しなかった。そのため路盤を剥ぎ、その上に堆積する耕作土と考えられる層を除去し遺構を検出した。

1．消失墳周溝（図17）　SXG1401

ここでは、消失墳の周溝と土坑を検出した。現地表面（路盤）から20～25cmで検出面にあたる。

消失墳の周溝は幅110cm～210cmを測り、深さは15cm～22cmと浅く、現状ではしっかりとした深さではない。地形の削平も考慮しないといけないが、やや浅い堀り方であろう。埋土は除去した覆土とは明らかに異なる黒色土で遺物が混じる。ほ場整備の段階で2／3が削平されており、消失墳の規模は判然としないが、復元すると径約10ｍ程の小円墳であろう。

周溝内からは、土師器破片と、須恵器の破片が出土した。土坑は調査区際にかかって検出したため全体像はつかめないが弥生後期の土器片が埋土上層より出土した。

2、出土遺物（図18）

147は須恵器坏身の破片で復元口径12.9cm、受部径14.0cm、受部最大径15.0cm、口縁は垂直に立ちあがり、回転ヨコナデにより薄手でシャープに仕上げられる。受部は口縁基部から短く外に伸び、やや厚手である。色調は7.5ＹＲ4／1褐灰色～5／2灰褐色を呈す。148は碗の胴部破片で、復元の胴部最大径が9.3cmを測る。頚部と胴部の境に沈線を廻らせ、その下にはカキメを施す。ロクロ回転方向は右回りである。底部付近はカキメの後ナデを施す。胴部中位に注口を挿入する穴を穿孔し、外面には使用痕と考えられる剥離がある。底部は遺存部から推定して平底気味になるものと考えられる。内面にはナデの単位が強く残り、シボリ痕あり。色調は7.5ＹＲ6／2灰褐色～4／1褐灰色で、断面芯部のみ7.5Ｙ6／1灰色を呈することから焼成は不良。149は坏身の口縁～受部で、垂直気味にやや短いかえりが立ちあがる。焼成は良。7.5Ｙ6／1灰色を呈す。150は高坏の脚裾部、端部は中央に陵を持つ。内外面にシボリ痕跡あり。色調は7.5Ｙ2／1黒色を呈す。焼成は堅緻。151は坏身の底部で内面に同心円の当て具痕が残る。外面はヘラ切と回転ヘラケズリ。

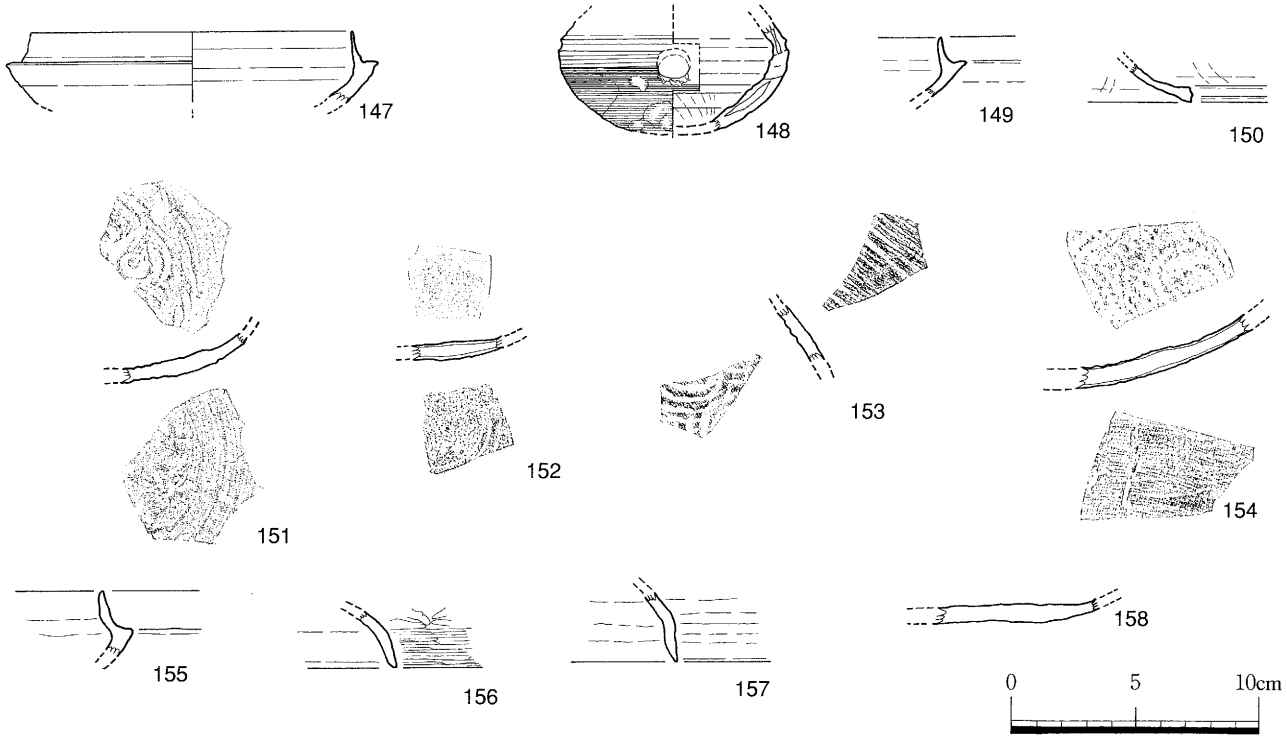


図18　2-3区　消失墳周溝土遺物　S＝1/3

7.5Y6／1灰色を呈す。胎土は粗粒。152も坏身の底部で、外面中心はヘラ切、周縁はヘラケズリを施す。7.5Y6／1灰色で断面芯部のみ7.5Y5／1褐灰色を呈す。153は甕の破片外面は平行叩き、灰かぶりあり。内面は同心円の当て具痕が残る。焼成は良好。154は甕の底部で、外面に平行叩き、焼き台の痕跡が残る。内面は同心円当て具痕で灰かぶり有り。

155～158は模倣土師器の破片である。須恵器を模倣した土師器で、橋口達也氏（1989）によると擬須恵土師器と分類され、須恵器を模倣しているが胎土、製作技法とも土師器といえるものである。蓋坏を模倣したと考えられるものがほとんどであるが、図化に耐えうるものは少ない。いずれも摩滅が著しい。155、158は坏身、156、157は坏蓋を模倣したもので、156、158にはミガキが施される。

橋口達也1989「似非土師須恵器」『横山浩一先生退官記念論文集生産と流通の考古学』

3、1号路線3区の調査

A、遺跡の現況

遺跡の現況は、他の調査区と同じく農道だった。隣接して、国指定史跡･新田原古墳群188号墳が所在するため、周溝等の関連施設や2区で検出した縄文時代の遺物包含層等に注意しながら調査した。

B、遺構と遺物（図19、図20、図21）

3区は、調査区の一部が農業用水管の埋設時や畑地耕作時に撹乱を受け、また現代の芋貯蔵穴等が多く、2区に見られたような遺物包含層などはなかった。

基本層序は図4に示した通りで、地表面から約120cmでアカホヤ火山灰層に達する。

調査区の一部には新田原古墳群188号墳が隣接するため、周溝の一部が調査区内にかからないか精査すると、調査区北壁に沿って9.4ｍの範囲でアカホヤ火山灰層が消失している部分を検出した。

中央部分と西側隅で後世に撹乱を受けているが、2本のトレンチを設定して北壁の土層と合わせて観察したところ、北壁土層（図21）では現地表面から42cmは道路敷設時やほ場整備に際して撹乱を受けており、検討の対象となるのは5、6、7層である。また1Trと2Trの土層との関係を観察すると4層が北壁土層の5層に対応し、4層が検出面から約15cm掘り込まれその中に1層、3層が堆積していることが分かる。1、2Trの1層と北壁の6層が、また1、2Trの3層と北壁の7層が対応するものである。特に6層は黒色土で粘性が強く腐食土層の可能性がある。出土遺物は撹乱に混じる砕片だけで、古墳に伴うものはない。このため、即座にこの掘り方を188号墳の周溝南端と捉えるのは慎重になるべきで、検出面である4層の性格により判断は動くことになるが決定的な判断材料は得られなかった。しかし古墳との位置関係からその可能性は高く、周溝端部と判断する。

- **新田原古墳群188号墳の現況（図19）**

今回の調査に際して188号墳の墳丘を測量した。S＝1／100で25cm間隔の等高線を入れた。

位置は新田原古墳群祇園原支群の北西部に位置し、有馬義人氏（2000）のグルーピングによると祇園原古墳群Aグループ内に位置する。昭和19年（1944年）に国指定史跡となった。北東側には前方後円墳である187号墳が所在する。以前に調査はされておらず、古墳に伴う遺物も見つかっていない。

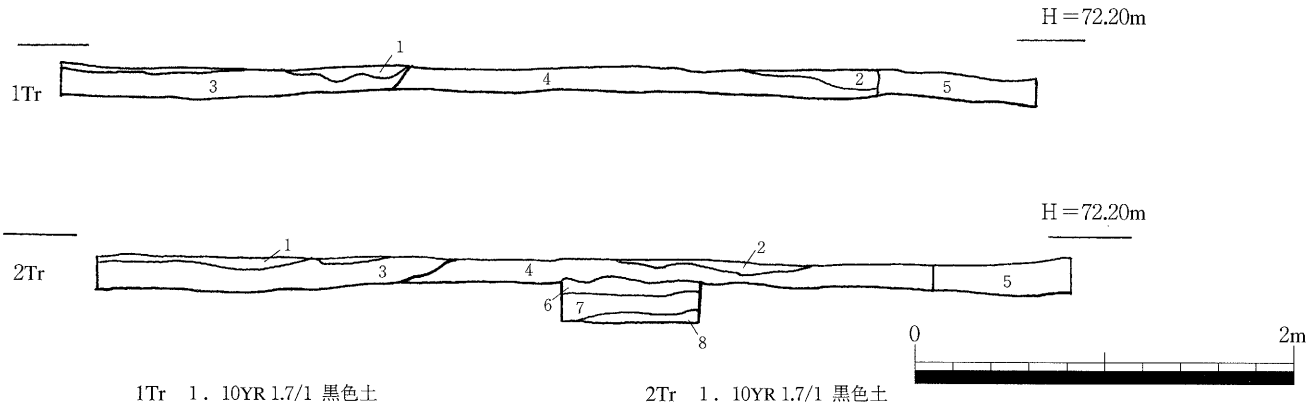
古墳の北西側は庭樹園で、北東側は畑地である。北東から北西にかけて土手が回るが、墳丘に沿っておらず、古墳に伴うものではなく後世に造成されたものであろう。墳丘は現状の墳裾から観察すると南から南東側にかけて削平が大きく、西側から北側が比較的遺存状況が良い。墳丘上は全体的に樹根によると思われる撹乱が著しく、特に墳頂平坦面は窪みや溝による撹乱を受ける。

図19　3区遺構分布図（新田原古墳群188号墳現況測量図・墳丘断面図）　S＝1/200

そのため墳丘の段築は不明瞭であり、本来の傾斜変換線と撹乱による傾斜が判別しにくい。最も明瞭なのは標高73.00m付近にある1段目（墳丘基底面から）の傾斜変換線で、2段目が標高74.25m付近、最上段が標高75.00m付近に廻るものである。最上段に関しては、墳頂部の撹乱と判別しにくいが、等高線の間隔から判断した。また2段目の変換線に関しては墳丘の残りが良い西側と北東側に標高74.00～74.25mにかけてテラス状をなす部分があるため判断した。

現状の墳丘規模はA－A'間で27.1m、遺存状況の良いB－B'間で28.6mである。墳裾からの墳丘高は3.08mを測る。また現状の墳頂部平坦面が大きく削平されていないことを前提とするとB－B'間で約13mを測る。このことから、現状では3段築成で、低平な墳丘の円墳である。内部主体は竪穴系の埋葬施設であろう。また現在時期を推定できる遺物資料はない。

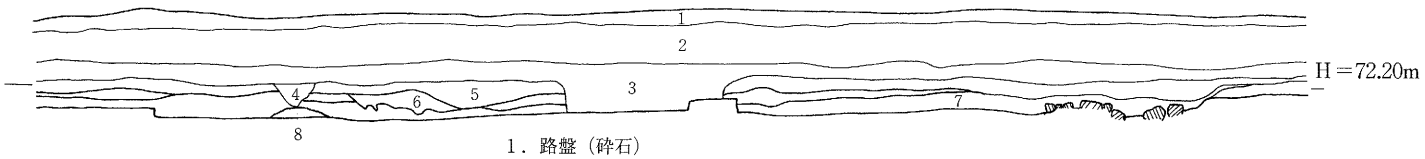
また、調査区に平行する南西側墳裾から検出掘り方外縁までは約5mを測るが、墳丘の削平を考慮に入れて考えると位置関係的には周溝外縁の可能性が高い。



1Tr　1．10YR 1.7/1 黒色土
2．10YR 2/1 黒色土
3．10YR 2/2 黒褐色土
4．10YR 3/1 黒褐色土
5．10YR 3/2 黒褐色土、ブロックまじり（農業用水管理設）

2Tr　1．10YR 1.7/1 黒色土
2．10YR 2/1 黒色土
3．10YR 2/2 黒褐色土
4．10YR 3/1 黒褐色土
5．10YR 3/2 黒褐色土（農業用水管埋設）
6．10YR 7/6 明黄褐色（アカホヤ火山灰層）
7．10YR 2/2 黒褐色土
8．10YR 2/3 黒褐色土

図20　3区　1Tr　2Tr　土層図　S＝1/40



1．路盤（砕石）
2．客土＋砕石
3．10YR 3/2 黒褐色（耕作土）
4．10YR 2/1 黒色土（樹根）
5．10YR 3/1 黒褐色
6．10YR 1.7/1 黒色土
7．10YR 3/2 黒褐色土
8．10YR 7/3 黄褐色土（アカホヤ火山灰層）

図21　3区　北壁　土層図　S＝1/80

表１　祇園原地区遺跡２－１区、２－２区Ａ,Ｂ層出土遺物観察表

報告書No.	種別	出土位置	器部	模様・調整		色調		胎土	備考
				外面	内面	外面	内面		
1	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢･口縁	C	ナデ	7.5YR4/3褐色	7.5YR6/6橙色	滑石,褐色粒,灰白色粒	
2	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢･口縁	C		7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR6/4にぶい褐色	滑石,黒色光沢粒,橙色粒,褐色粒	
3	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢･口縁	B	B	7.5YR3/1黒褐色	7.5YR5/3にぶい褐色	滑石,褐色粒	口唇部に内面側から刺突文
4	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢･口縁	B		10YR6/4にぶい黄橙色	7.5YR5/4にぶい褐色	滑石,褐色粒	口唇部に内面側から刺突文
5	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢･口縁	a	短沈線	10YR5/4にぶい黄褐色	7.5YR4/6褐色	滑石,褐色粒,黒色粒	口唇部に内面側から刺突文
6	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	a	短沈線	7.5YR5/3にぶい褐色	7.5YR5/4にぶい褐色	滑石,褐色粒	
7	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E	短沈線	7.5YR4/3褐色	7.5YR4/3褐色	滑石,褐色粒	
8	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR4/3褐色	7.5YR4/3褐色	滑石,褐色粒	
9	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		7.5 YR4/3褐色	7.5YR4/3褐色	滑石,黒色粒,褐色粒	
10	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR3/1黒褐色～7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR4/3褐色	滑石,褐色粒	
11	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR4/1褐灰色～5/3にぶい褐色	7.5YR4/3褐色	滑石,褐色粒	
12	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		10YR3/1黒褐色～5/4にぶい褐色	7.5YR5/4にぶい褐色	滑石,褐色粒	
13	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		10YR3/1黒褐色	7.5YR6/4にぶい褐色	滑石,黒色粒,褐色粒	
14	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR4/2灰褐色	7.5 YR4/2灰褐色	滑石,褐色粒	
15	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR4/2灰褐色	7.5YR5/4にぶい褐色	滑石,褐色粒	
16	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR4/3褐色	7.5YR4/4褐色	滑石,黒色粒,褐色粒	
17	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR5/4にぶい褐色	滑石,褐色粒	
18	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR4/2灰褐色	7.5YR5/4にぶい褐色	滑石,褐色粒	
19	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR4/2灰褐色	7.5YR5/4にぶい褐色	滑石,黒色粒,褐色粒	
20	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	F		7.5YR3/1黒褐色	7.5YR4/2灰褐色	滑石,褐色粒	
21	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	G	条痕	10YR3/1黒褐色	10YR3/2黒褐色	滑石,褐色	
22	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	D		10YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR4/3褐色	滑石,褐色粒	
23	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	d		10YR6/4にぶい黄橙色	10YR5/4にぶい黄褐色	滑石,褐色	
24	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	d		10YR3/2黒褐色	10YR4/2灰黄褐色	滑石,褐色	
25	Ⅰ－1	2－2区A層	深鉢	d		10YR3/1黒褐色	10YR4/1褐灰色	滑石,褐色	
26	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	A	沈線･ナデ	2.5Y6/2灰黄色	10YR6/3にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	口唇部に内面側から刺突文
27	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR6/6橙色	7.5YR6/4にぶい褐色	石英,長石,白色粒,褐色粒,明褐色粒	
28	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	d		7.5YR5/4にぶい褐色	10YR6/4にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,橙色粒	
29	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR6/6橙色	7.5YR6/6橙色	石英,長石,白色粒,橙色粒	
30	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR7/4にぶい黄橙色	7.5YR7/4にぶい黄橙	石英,長石,黒色光沢粒,橙色粒	
31	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E	条痕	10YR5/2灰黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	白色粒,黒色光沢粒,橙色粒,褐色粒	
32	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E	条痕	7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR6/4にぶい橙色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,白色粒	
33	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR5/3にぶい褐色	7.5YR6/4にぶい橙色	長石,黒色光沢粒,橙色粒	
34	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E		10YR6/3にぶい黄橙色	10YR6/3にぶい黄橙色	長石,黒色光沢粒,橙色粒	
35	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	黒色光沢粒,灰白色粒,橙色粒	
36	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E	条痕	10YR4/1褐灰色	10YR5/2灰黄褐色	長石,黒色光沢粒,橙色粒,褐色粒,灰白色粒	
37	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E		7.5YR6/6橙色	7.5YR6/4にぶい黄橙色	長石,黒色光沢粒,白色粒,褐色粒	
38	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E	条痕	10YR3/1黒褐色	10YR4/1褐灰色	黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
39	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	石英,長石,黒色光沢粒,灰白色粒	
40	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	D		2.5YR6/3にぶい黄色	10YR7/2にぶい黄橙色	黒色光沢粒,石英,褐色粒,灰白色粒	
41	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	D		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR6/3にぶい黄橙色	石英,長石,黒色光沢粒,褐色粒	
42	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	D	条痕	10YR5/2灰黄褐色	2.5YR7/3浅黄色	黒色光沢粒,褐色粒,にぶい黄橙色粒	
43	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	E		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	石英,長石,黒色光沢粒,褐色粒	
44	Ⅰ－2	2－2区A層	深鉢	G		10YR3/2黒褐色	10YR3/2黒褐色	黒色光沢粒,灰白色粒,白色粒,褐色粒	
45	Ⅱ	2－1区A層	深鉢	a	条痕	5YR4/4にぶい赤褐色	5YR4/6赤褐色	石英,灰色光沢粒,黒色光沢粒,褐色粒	
46	Ⅱ	2－1区A層	深鉢	A-1		7.5YR5/4にぶい褐色	10YR6/4にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,褐灰色粒	
47	Ⅱ	2－1区A層	深鉢	A-1		7.5YR3/3暗褐色	7.5YR4/1褐灰色	石英,黒色光沢粒,浅黄橙色,褐色粒	
48	Ⅱ	2－2区A層	深鉢	a	条痕	10YR3/2黒褐色	10YR3/2黒褐色	石英,黒色光沢粒,褐色粒	
49	Ⅱ	2－2区A層	深鉢	a	条痕	7.5YR4/3褐色	7.5YR4/2灰褐色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒	
50	Ⅱ	2－2区A層	深鉢	a	条痕	7.5YR4/2灰褐色	10YR3/2黒褐色	石英,黒色光沢粒,橙色粒,灰白色粒	
51	Ⅱ	2－2区A層	深鉢	b-2	条痕	10YR3/2黒褐色	10YR4/3にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,橙色粒	
52	Ⅱ	2－2区A層	深鉢	b-2	条痕	10YR4/3にぶい黄橙色	7.5YR4/3褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
53	Ⅱ	2－2区A層	深鉢	b-2	条痕	10YR3/2黒褐色	10YR3/1黒褐色	石英,にぶい黄橙色,褐色粒	
54	Ⅱ	2－2区A層	深鉢	A-2	条痕	7.5YR5/3にぶい褐色	10YR6/4にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,白色粒,褐色粒	
55	Ⅱ	2－2区A層	深鉢	b-2	条痕	10YR3/1黒褐色	10YR3/1黒褐色	石英､金色光沢色,灰白色粒,褐色粒	
56	Ⅱ	2－2区A層	深鉢	A-1	条痕	10YR3/1黒褐色	10YR4/2灰黄褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	

報告書No.	種別	出土位置	器部	模様・調整		色調		胎土	備考
				外面	内面	外面	内面		
57	Ⅱ	2−2区A層	深鉢	A−2	条痕	10YR6/3にぶい黄橙色	2.5YR6/3にぶい黄色	石英,黒色光沢粒,橙色粒,灰白色粒	
58	Ⅱ	2−1区A層	深鉢	D		7.5YR5/4にぶい褐色	10YR6/4にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,褐灰色粒	
59	Ⅱ	2−2区A層	深鉢	D	条痕	10YR3/2黒褐色	10YR3/3暗褐色	石英,黒色光沢粒,白色粒,褐色粒	
60	Ⅱ	2−2区A層	深鉢	D	条痕	10YR4/1褐灰色	10YR3/1黒褐色	黒色光沢粒,白色粒,褐灰色粒,褐色粒	
61	Ⅱ	2−2区A層	深鉢	D	条痕	7.5YR4/2灰褐色	7.5YR4/3褐色	石英,黒色光沢粒,橙色粒,白色粒,褐灰色粒	
62	Ⅱ	2−2区A層	深鉢	d	条痕	7.5YR5/4にぶい褐色	10YR4/3にぶい黄褐色	石英,黒色光沢粒,褐灰色粒,褐色粒,灰白色粒	
63	Ⅱ	2−2区A層	深鉢	C	条痕	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR5/1黄灰色	黒色光沢粒,橙色粒,灰白色粒	
64	Ⅱ	2−2区A層	深鉢	b−2	条痕	10YR6/3にぶい黄橙色~3/1黒褐色	10YR5/4にぶい黄褐色~3/1黒褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,橙色粒	
2−2区B層									
65	Ⅰ−1	2−2区B層	深鉢	E		7.5YR6/4にぶい橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	滑石,橙色光沢粒,白色粒,褐色粒	
66	Ⅰ−1	2−2区B層	深鉢	E		7.5YR6/3にぶい褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	滑石,灰色光沢粒,褐色粒,橙色粒	
67	Ⅰ−1	2−2区B層	深鉢	E		10YR4/2灰黄褐色	10YR5/4にぶい褐色	滑石,褐色粒,橙色粒	
68	Ⅰ−1	2−2区B層	深鉢	J		7.5YR5/3にぶい褐色	10YR6/4にぶい黄橙色	滑石,褐色粒,灰色粒,橙色粒	
69	Ⅰ−1	2−2区B層	深鉢	D		7.5YR5/3にぶい褐色	5YR4/6赤褐色	滑石,褐色粒,黒褐色粒	
70	Ⅰ−1	2−2区B層	深鉢	D		7.5YR3/1黒褐色	7.5YR4/3褐色	滑石,褐色	
71	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	A	短沈線	10YR3/1黒褐色	10YR3/2黒褐色	黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒,石英	口唇部に内面側から刺突文
72	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	E		10YR3/1黒褐色	7.5YR5/3にぶい褐色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒	
73	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	E		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒	
74	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	E		10YR6/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒	
75	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	E		10YR3/1黒褐色	10YR5/2灰黄褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
76	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	E		10YR3/1黒褐色	10YR5/2灰黄褐色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒	
77	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	E	条痕	10YR4/1褐灰色	10YR7/4にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,褐色粒	
78	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	D		10YR5/2灰黄褐色	10YR6/4にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
79	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	D		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR3/2黒褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色光沢粒,褐色粒	
80	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	D		10YR6/4にぶい黄橙色	10YR6/6明黄褐色	石英,黒色光沢粒	
81	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	D	条痕→ナデ	10YR3/1黒褐色	10YR4/3にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,橙色粒	
82	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	D		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR6/3にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒	
83	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	E		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR5/3にぶい黄褐色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,褐灰色砂粒	
84	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	E		10YR4/1褐灰色	10YR6/3にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,橙色粒	
85	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	E		10YR5/1褐灰色~5/2灰黄褐色	10YR5/1褐灰色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
86	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	H		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	石英,褐色粒,橙色粒	
87	Ⅰ−2	2−2区B層	深鉢	I		10YR4/1褐灰色	10YR3/2黒褐色	石英,褐色粒,灰白色粒	
88	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	A−3	条痕	10YR6/2灰黄褐色	10YR4/1褐灰色	石英,黒色光沢粒,白色粒,褐色粒,橙色粒	
89	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	A−3	条痕	10YR3/1黒褐色	10YR5/2灰黄褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒,橙色粒	
90	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	a	ナデ	10YR4/1褐灰色	10YR4/3にぶい黄褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,橙色粒,	
91	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	a	ナデ	7.5YR5/3にぶい褐色	7.5YR5/4にぶい褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
92	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	B	条痕	10YR4/2灰黄褐色	7.5YR4/4褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
93	Ⅲ	2−2区B層	深鉢	ミガキ?	ミガキ?	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	黒色光沢粒,褐色粒,褐灰色粒	
94	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	a	条痕	10YR4/2灰黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,橙色粒	
95	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	a	条痕	10YR5/2灰黄褐色	10YR5/4にぶい褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
96	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	a	条痕	10YR3/1黒褐色	10YR4/1褐灰色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,橙色粒	
97	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	A−2	条痕	10YR4/2灰黄褐色	10YR5/4にぶい褐色	黒色光沢粒,灰白色粒,白色粒,褐色粒	
98	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	b	条痕	10YR4/2灰黄褐色	7.5YR4/3褐色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒	
99	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	a	条痕	10YR3/1黒褐色	10YR4/3にぶい黄褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
100	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	A−2	条痕	10YR3/1黒褐色	10YR5/1褐灰色~3/1黒褐色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒	
101	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	A−2	条痕	10YR3/1黒褐色	2.5Y5/2暗灰黄色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
102	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	A−2	条痕	10YR3/1黒褐色	10YR4/2灰黄褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,橙色粒	
103	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	b	条痕	10YR3/2黒褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
104	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	B	条痕→ナデ	10YR3/1黒褐色	10YR4/2灰黄褐色	石英,黒色光沢粒,灰白色粒,橙色粒	
105	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	D	条痕→ナデ	10YR3/1黒褐色	10YR5/1褐灰色	石英,灰白色粒,黒色光沢粒,橙色粒	
106	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	D	条痕	10YR3/1黒褐色~7/2にぶい黄橙	10YR3/1黒褐色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒	
107	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	D	条痕	10YR4/1褐灰色	7.5YR4/3褐色	黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒,橙色粒	
108	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	D	条痕→ナデ	10YR4/1褐灰色	10YR6/3にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,褐色粒,灰白色粒	
109	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	d	条痕→ナデ	7.5YR5/3にぶい褐色	7.5YR4/3褐色	黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒	
110	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	C		5YR4/4にぶい赤褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	石英,黒色光沢粒,橙色粒,褐色粒	
111	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	d	条痕→ナデ	7.5YR6/4にぶい橙色	7.5YR6/6橙色	石英,灰白色粒,褐色粒	
112	Ⅱ	2−2区B層	深鉢	d	条痕→ナデ	10YR7/4にぶい黄橙色	2.5Y7/2灰黄色	黒色光沢粒,灰白色粒,褐色粒,褐灰色粒	

表２　祇園原地区遺跡２区　石器計測表

遺物番号	報告書No.	器種	石材	出土位置	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
6	PL８−３	剥片	姫島産黒耀石	A層	1.95	1.35	0.40	0.7	
26	PL８−３	剥片	チャート	A層	3.85	1.45	0.75	4.7	
32	PL８−３	剥片	頁岩	A層	4.65	2.95	0.65	9.6	
48	PL８−３	剥片	ホルンフェルス	A層	2.30	1.70	0.20	1.2	
51	117	敲石	砂岩	A層	14.40	4.00	−	343.5	
59	PL８−３	剥片	チャート	A層	3.00	1.85	0.65	2.6	
109	PL８−３	剥片	姫島産黒耀石	A層	2.25	2.90	0.45	3.1	
121	118	敲石	頁岩	A層	9.75	2.20	−	42.2	
3	PL８−１	剥片	姫島産黒耀石	B層	2.10	1.80	1.50	4.1	
7	115	剥片	姫島産黒耀石	B層	3.10	2.10	0.60	4.4	
13	PL８−１	剥片	姫島産黒耀石	B層	2.45	1.15	0.50	1.3	
50	PL８−１	剥片	姫島産黒耀石	B層	2.30	1.35	0.35	1.0	
64−１	PL８−１	剥片	姫島産黒耀石	B層	3.20	2.25	0.75	4.5	
64−２	PL８−１	剥片	姫島産黒耀石	B層	2.15	1.70	0.40	1.0	
66	116	剥片	チャート	B層	2.00	1.05	0.25	0.5	
67−１	113	石匙	姫島産黒耀石	B層	4.00	2.90	0.60	7.5	
67−２	PL８−１	剥片	姫島産黒耀石	B層	1.70	2.00	0.65	1.7	
67−３	PL８−１	剥片	姫島産黒耀石	B層	1.35	1.45	0.65	1.0	
70	114	尖頭器	頁岩	B層	2.65	1.85	0.65	3.3	２次加工痕有
71−１	PL８−１	剥片	姫島産黒耀石	B層	1.85	1.90	0.65	2.0	
71−２	PL８−１	剥片	姫島産黒耀石	B層	1.65	2.00	3.50	1.1	

姫島産黒耀石	総出土重量	33.4g
チャート	総出土重量	7.8g
頁岩	総出土重量	55.1g

表３　祇園原地区遺跡土坑出土弥生土器観察表

報告書No.	器種	残存率	法量	調整	色調		胎土
			口径/頸部径/底径/脚裾径/胴部最大径/器高(cm)	外面／内面	外面	内面	
124	口縁部	破片	-/-/-/-/-/-	ヨコナデ,不定ナデ/ハケメ	2.5YR5/1黄灰色	5Y3/1オリーブ黒色	石英,長石,褐色粒,橙色粒
125	甕口縁	小破片	-/-/-/-/-/-	ヨコナデ/ヨコナデ	10YR8/4浅黄橙色	10YR8/4浅黄橙色	粗粒　石英,褐色粒,橙色粒
126	甕胴部	破片	-/-/-/-/-/-	ヨコナデ/斜めハケ,摩滅	7.5YR7/6橙色	10YR7/4にぶい黄橙	精良　長石,石英,褐灰色粒,橙色粒
127	甕胴部	小破片	-/-/-/-/-/-	ナデ/ナデ、摩滅	5Y8/1灰白色	5Y7/1灰白色	精良　石英,褐灰色粒,橙色粒
128	甕胴部	小破片	-/-/-/-/-/-	ヨコハケ,ヨコナデ/ハケメ	2.5YR5/1黄灰色	5Y3/1オリーブ黒色	石英,長石,褐色粒,橙色粒
129	甕胴部	小破片	-/-/-/-/-/-	ハケ,ナデ/斜めハケ	7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	粗粒　褐灰色粒,褐色粒,橙色粒
130	壺胴部	破片	-/-/-/-/-/-	ヨコナデ/ハケメ,オサエ	10YR8/4浅黄橙色	7.5Y5/1灰色	粗粒　石英,長石,褐色粒,橙色粒
131	壺胴部	小破片	-/-/-/-/-/-	ヨコナデ/ナデ,オサエ	10YR8/3浅黄橙色	10Y5/1灰色	粗粒　褐灰色粒,褐色粒,橙色粒
132	壺頚部	小破片	-/-/-/-/-/-	ヨコナデ,ヨコミガキ/タテナデ,ハケメ	5Y8/1灰白色	5Y7/1灰白色~10Y5/1灰色	精良　褐色粒,橙色粒
133	壺胴部	小破片	-/-/-/-/-/-	ミガキ,ナデ/ナデ	5Y8/1灰白色~7/1灰白色	2.5Y8/2灰白色	精良　橙色粒,褐灰色粒
134	甕頚部~胴	1/4	-/-/-/-/-/-	ハケ→ミガキ/タテナデ	2.5Y8/2灰白色	5Y7/1灰白色	精良　褐色粒、金色光沢粒
135	口縁	小破片	-/-/-/-/-/-	ナデ/ナデ	2.5Y8/2灰白色	2.5Y8/2灰白色	精良　石英,長石,褐色粒
136	甕底部	1/3	12.4/10.3/-/-/-/-	タテハケ,ヨコナデ/ヨコハケ,タテハケ→ナデ	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	精良　橙色,褐灰色,褐色,金色光沢粒
137	壺底部	1/3	-/-/8.5/-/-/-	ミガキ/指圧痕　ナデ	2.5Y8/1~7/1灰白色	2.5Y8/2灰白色	精良　褐色粒,石英,長石
138	壺底部	1/2	-/-/7.1/-/-/-	ミガキ/ナデ	2.5Y7/3浅黄橙色	10Y4/1灰色	粗粒　長石,褐色粒,橙色粒,褐灰色粒
139	甕底部	1/4	-/-/5.2/-/-/-	摩滅/摩滅	5YR6/6橙色	5YR4/6赤褐色	粗粒　褐灰色粒
140	高杯柱部	1/3	-/-/-/-/7.5/-	タテハケ/タテナデ,シボリ	10YR8/3浅黄橙色	2.5Y8/3淡黄色	粗粒　褐色粒
141	器台脚部	1/5	-/-/-/24/-/-	摩滅/摩滅	7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR7/6橙色	粗粒　長石,石英,褐灰色粒,褐色粒
142	甕胴部下半	1/3	-/-/-/-/-/-	ナナメハケ→ナデ/タテナデ,ナナメハケ,ヨコハケ	2.5Y7/2灰黄色	2.5Y7/1灰白色	粗粒　褐灰色,褐色,橙色粒
143	甕底部	1/3	-/-/7.6/-/-/-	ナデ/ナデ,ハケメ	2.5YR7/2灰黄色	2.5Y7/1灰白色	粗粒　褐灰色、褐色粒,橙色粒
144	甕底部	底部完	-/-/6.5/-/-/-	タテハケ→ナデ/指オサエ,タテナデ	10YR8/4浅黄橙色	5Y5/1灰色	粗粒　褐色粒,褐灰色粒,長石
145	甕底部	1/3	-/-/6.8/-/-/-	ミガキ,ヨコナデ/オサエ	10YR8/4浅黄橙色	5Y5/1灰色	粗粒　褐灰色,褐色粒
146	甕底部	1/3	-/-/6.3/-/-/-	摩滅/摩滅	2.5Y7/2灰黄色	2.5Y7/1灰白色	粗粒　褐灰色,褐色,橙色粒

第Ⅳ章　出土土器の自然科学分析

西都市、祇園原地区遺跡から出土した土器（胎土）の蛍光X線分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

土器（胎土）に含まれる元素のうち、カリウム（K）、カルシウム（CA）、ルビジウム（RB）、ストロンチウム（Sr）の４元素は、土器胎土の地域性を示す有効な因子とされており、K2O-CAO分布図やRB2O-SrO分布図を主な指標として土器の産地同定が行われている（三辻,1999）。

ここでは、祇園原地区遺跡から出土した土器（胎土）について蛍光X線分析を行い、土器の産地や流通等に関する情報の収集を試みた。

2．試料

試料は、縄文土器２点、土師器１点、須恵器２点の計５点である。

2．分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子（株）製，ＪＳＸ3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（ＦＰ法）による定量分析を行った。以下に分析の手順を示す。

1）試料を絶乾（105℃・24時間）
2）分析装置の固定試料ステージに固定
3）測定時間300秒、照射径20ｍｍ、電圧30ｋｅV、試料室内真空の条件で測定

なお、X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はＳｉ（Ｌｉ）半導体検出器である。

3．分析結果

各元素の定量分析結果（ｗｔ％）を表１に示し、図１にCAO分布図およびRB2O-SrO分布図を示す。

4．考察

土器の産地同定を行う際の指標の一つとされているＣＡＯ－K2O分布図（図１）によると、須恵器の２点はカリウム（K2O）の含量がいずれも4.2％と高い値であり、縄文土器の0.9～1.5％、土師器の2.5％とは明らかに異なっている。カルシウム（CAO）の含量は、須恵器の２点は1.1％および1.7％とやや近接しているが、縄文土器の２点は0.4％および1.8％と大きく異なっている。また、土師器は0.3と低い値である。RB2O-SrO分布図によると、須恵器の２点と土師器の１点は分布が近接しているが、縄文土器の２点はそれぞれ分布が大きく異なっている。

以上の結果から、須恵器の２点については素材となった粘土の給源が同一である可能性が考えられるが、分析データが少ないことから確定的なことは言えない。また、縄文土器の２点は素材となった粘土の給源が異なっていると考えられ、土師器は須恵器や縄文土器とは粘土の給源が異なっていると考えられる。

今後このような基礎的なデータを蓄積することで、土器の生産地や流通に関する具体的な情報

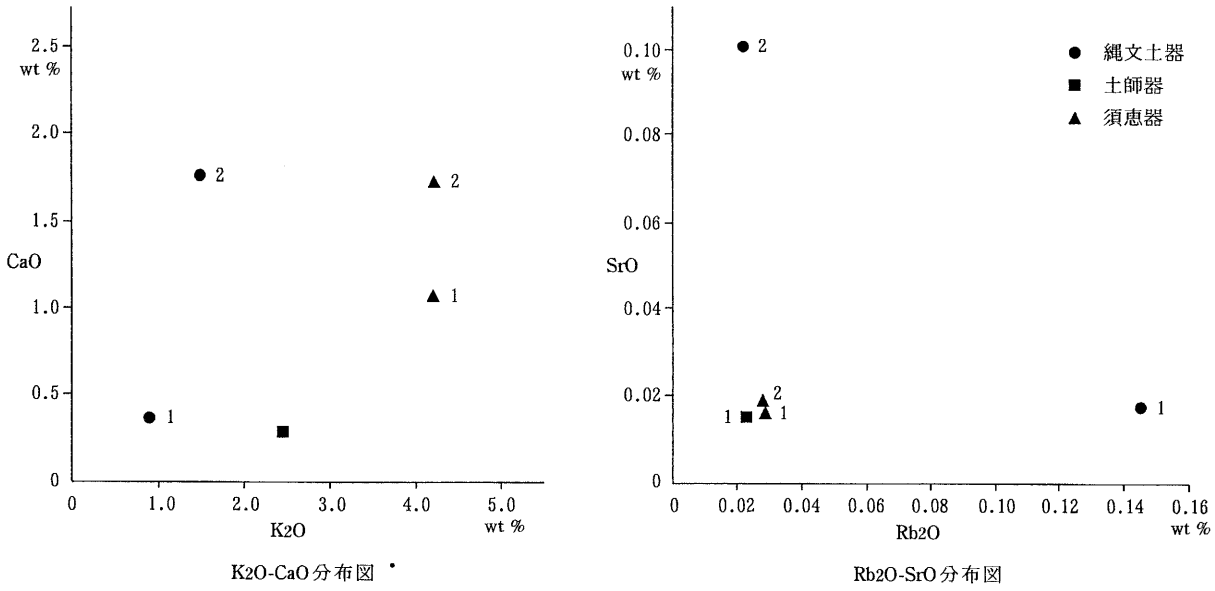
が得られるものと期待される。

三辻利一（1998）元素分析による古代土器の胎土研究．人類史研究第10号，p.11－39.
三辻利一（1999）元素分析による須恵器の産地推定．考古学と自然科学（4）．同成社，p.294－313.

表4　西都市、祇園原遺跡における蛍光X線分析結果

単位：wt(%)

地点・試料		縄文土器		土師器	須恵器	
原子No.	化学式	1	2	1	1	2
11	Na_2O	0.103	0.690	0.484	0.815	0.582
12	MgO	6.619	1.088	0.932	1.504	1.169
13	Al_2O_3	21.980	24.363	20.119	21.415	17.615
14	SiO_2	51.201	46.683	58.423	60.443	65.313
15	P_2O_5	1.105	1.249	1.464	1.261	1.476
16	SO_3	0.196	0.300	0.372	0.076	0.009
19	K_2O	0.883	1.505	2.450	4.205	4.214
20	CaO	0.375	1.766	0.286	1.071	1.732
22	TiO_2	1.757	2.799	1.473	1.221	1.258
23	V_2O_5	0.068	0.096	0.035	0.012	0.012
24	Cr_2O_3	0.139	0.000	0.000	0.000	0.000
25	MnO	0.389	2.301	0.255	0.185	0.266
26	Fe_2O_3	15.005	16.941	13.610	7.694	6.306
37	Rb_2O	0.147	0.023	0.024	0.030	0.030
38	SrO	0.018	0.102	0.015	0.017	0.018
40	ZrO_2	0.018	0.097	0.057	0.052	0.000



K2O-CaO分布図　　Rb2O-SrO分布図

図22　西都市、祇園原地区遺跡出土土器のK_2O-CaO分布図およびRb_2O-SrO分布図

第Ⅴ章　まとめ

1、縄文時代

A.土器群

今回の調査で最も多く出土したのが縄文土器破片である。その中で図化し得た112点の資料を対象に分類すると大きく3類型に分類でき、文様から22類に細分した。

Ⅰ類は沈線文と列点文で施文するもので、縄文前期後半の曾畑式土器である。胎土の差で2種に分けた。Ⅰ－1類とⅡ類の破片を胎土分析した結果（表4)、Ⅰ－1類（縄文土器1）にはⅡ類（縄文土器2）に比べてMgO、SiO_2といった元素が多く含まれることが分かり、曾畑式土器の特徴である胎土に入る滑石［$Mg_3Si_4O_{10}(OH)_2$］に由来するものと考えられる。胎土に滑石を混入させた曾畑式土器の県内での出土例は少なく、西北九州からの「移入品」とする見解（乗畑光博1987)、混和材として用いられる滑石が原石として移入した可能性を指摘する見解（水ノ江和同1990）がある。材料として滑石が移入していればさらに滑石を胎土に含んだ曾畑式土器の出土例が増加するものと考えられ、今後の出土状況に注目する必要がある。第4章の報告では$CaO-K_2O$分布とRb_2O-SrO分布図においても大きく差が出ており、他の元素からも素材となった粘土の給源が異なると分かった。いずれも少量の分析なので、基礎的データとして報告する。

施文法は口縁部に刺突文を施し、そのすぐ下には短沈線の区画を挟まず横位に展開する三角形を基本とした幾何学文が施されること、沈線はしっかりと深く施文されること、また縦位に展開するようなG類などの特徴から曾畑２式古段階～新段階（水ノ江1990）にあたると考えられる。

Ⅰ－2類は滑石の混入しない曾畑式土器で施文法や文様はほぼ共通しているが、Ⅰ－2類には施文具の違いや沈線が線刻状に浅いものがあり、内面に条痕の残るものがある。口縁部に刺突列点文を施し、沈線による横に展開する文様帯などは曾畑２式にあたり、26は古い様相を持つ。また、刺突列点文のない口縁や線刻状の施文、縦位に展開する文様は新段階のものと考えた。

Ⅱ類は突帯文で文様を施す土器群である。A類の土器群は横位の突帯文で構成され、轟Ｂ式系のものと考えているがＢ類のような曲線の突帯を持ち条痕が残らないものやｂ－1類やｂ－2類のような曲線の微隆起突帯や縦位や横位の微隆起突帯文を施す土器群については、その範疇には入らない別の土器群として捉える必要がある。ｂ－1類、ｂ－2類は、その施文法の特徴から深浦式系土器である可能性が高い。このことからⅡ類は縄文前期～中期前半にかけての土器群であろう。

また出土層位の関係を見ると先に形成されたＢ層からはⅡ類が多く出土し、A層からはⅠ－1類が多く出土するといった特徴があるが、Ｂ層からA層よりも新しい土器が出土するため、この2層の堆積関係と包含する遺物の相対的前後関係は別ものである。A層の形成過程はその包含する遺物の多様さから、後世に形成されたものと考えられ、遺物の前後関係を検討する共伴資料ではない。

B.石器群

A層からは敲石と剥片が出土した。石材に注目すると姫島産黒耀石2点、チャート2点、ホルンフェルス1点、頁岩2点、砂岩1点（敲石）と多様である。剥片は縦長状を呈す。

B層からは石匙（製品）、尖頭器（製品）、剥片が出土した。石材は姫島産黒耀石が11点、チャート1点、頁岩1点で、姫島産黒耀石が多数を占める。剥片は縦長状を呈する点がA層と共通するため、縦長剥片の取得を意図した製作が行なわれたものと考える。また、A層は敲石と剥片、B層は製品と剥片というセットで出土するため、周辺で石器製作が行なわれたことを示す。特にB層出土の石器と剥片は包含層が縄文前期～中期前半にあたると考えられ、当該期の特徴を表す資料となるだろう。

2、弥生時代の遺構と遺物

2区で土坑を2基検出した。しかし2－3区で検出したものは調査区の境界にかかったもので、全体を調査できなかったためはっきりしないが、埋土の上層に弥生後期前半の破片が混じる。

2－2区で検出した土坑1は、旧地形が整地により削平されていたため、本来の形状は留めていなかったが、多くの弥生後期前半の土器片が出土した。その構成は日常的な甕や壷といった器種の中に器台や高坏、ミニチュア土器の破片、約10ｃｍの石英塊が混じる点が注目される。

類例を求めると、弥生時代の住居や集落の調査において多く住居に伴う土坑が検出されているが、土器が集積したものがまとまって検出された調査例は浦田遺跡（北郷他編1985）が挙げられる。宮崎学園都市建設事業に伴い調査が行なわれ、弥生後期後半中頃～終末期の集落で、10基の土坑が住居に伴い検出された。形態は円形、楕円形、不整円形を呈し、約1ｍ～2ｍの規模で深さはばらつきがあり約0.3ｍ～1.2ｍである。中でもＳＣ1、3、4においては土器片が集中して出土しており、住居跡内から出土した器台の破片と土坑内から出土した破片が接合する事例などが報告されている。また、ＳＣ5のように土坑を埋めた上に甕をのせている事例などもあり、祭祀的な痕跡等も見られる。

このことからも土坑の用途は、貯蔵穴として用いられるもの、貯蔵穴として用いられたものが廃棄土坑として用いられたもの、単に廃棄のために掘削されたもの、祭祀的な用途として用いられたもの、等多様なあり方を示すものであり、住居に伴うものであることが多いため、調査区周辺に弥生時代後期前半に定点を置く住居、集落跡が存在する可能性が高い。

3、古墳時代の遺構と遺物

2－3区で消失墳の周溝を、3区で新田原古墳群188号墳の周溝外縁部を検出した。消失墳周溝は残存部の内径から復元すると約10ｍの円墳である。現在この古墳群で確認された消失墳は47例あり（有馬2003）、この事例は48例目となる。周溝検出面と埋土からは多くの土器片が出土し、須恵器に関しては破片資料であるが、時期を推定しうる情報を持つ。

大阪府所在の陶邑窯跡群で行われている既往の須恵器編年に対応させるとＴＫ10型式に対応する段階からＴＫ43型式段階のものと推定される。特に147、151坏身破片と148𤭯はＴＫ10型式段階～ＭＴ85型式段階の特徴を示す資料である。特に151の内面に残る同心円当て具痕跡は特徴的である（田辺1980）。

次に注目したのが断面の色調である。148の色調は表面が7.5ＹＲ6／2灰褐色～4／1褐灰色を呈すが断面芯部は7.5Ｙ6／1灰色を呈す。逆に152は表面が7.5Ｙ6／1灰色で断面芯部が7.5ＹＲ5／1褐灰色を呈す。この差が胎土に起因するのか焼成に起因するのかを第4章の胎土分析の結果

から考えると、分析資料の須恵器1は148と同じ色調を呈す破片で、須恵器2は152とほぼ同じ色調を呈す西都市国分遺跡出土のＴＫ10型式段階の坏蓋破片で、胎土の差はほとんどないことが分かった。そのため焼成の差であろう。

また、このＴＫ10段階は6世紀中葉にあてられ、九州は筑紫君磐井の反乱直後の時期にあたると考えられている。この時期は屯倉の設置や6世紀前半における葬制の全国的な変化、明確な羨道を有する横穴式石室の全国的な導入と玄室内への土器副葬の一般化が指摘され（柳沢1989、土生田1994、重藤1999)、後期古墳の在り方を特徴づける群集墳の築造開始など政治体制と古墳の変質が起こる変革の時期にあたる。この時期の宮崎県内における古墳、古墳群の様相はまだ不明確である。

この新田原古墳群祇園原支群では古墳群の特質として、６世紀代に築造されたと考えられる前方後円墳が多くあり、そのうち４基が墳長50m以上100m未満の規模を持ち、南部平野部に所在する下北方古墳群と勢力を２分する、地域の盟主的古墳群である可能性が指摘されている。また、６世紀代の前方後円墳の１つである百足塚古墳は、内部主体に横穴式石室が採用されることが明らかになっている（有馬2003)。

このことから、当該期の宮崎県の古墳時代を理解する上では、最も情報の多い古墳群であり、今回の調査成果はそれを構成する小円墳においても同時期のものが所在するといった事例が増えたことになる。また、一ッ瀬川を挟んだ対岸の西都原台地の中段域にある国分遺跡においても、西都原古墳群の一支群にあたる消失墳周溝が検出されており、その埋土からもＴＫ10型式段階に対応する須恵器坏身破片が出土していることから、さらに事例は増えていくものと考えられる。地下式横穴墓の動向と共に今後の調査の視点としたい。

4、新田原古墳群祇園原支群188号墳と200号墳の墳丘について（図23、24）

ここでは新田原古墳群祇園原支群188号墳と200号墳の墳丘を比較する。

まず200号墳の現況をまとめる（図23)。２区に隣接した牧草地の中にあり、188号墳と直線距離にして約110ｍの位置であり、２－３区で検出した消失墳との距離は約80ｍを測る。現況をｓ＝１／100、25ｃｍ間隔の等高線で測量した。東西方向を削平され楕円形状を呈す。比較的墳丘の残りが良いＡ－Ａ’間では径18.7ｍ、削平が著しいＢ－Ｂ’間では14.5ｍを測る。現状の墳裾からの墳丘高は3.02ｍを測る。墳頂平坦面は5.4ｍを測る。表採資料等の時期を推定できる資料、過去の調査歴はない。

墳丘南側には部分的に窪んだ部分があり、小礫が多数露出する（図23アミ部)。等高線にも変化が現れる。この部分を遺構と捉えるなら内部主体に横穴式石室を持つ可能性がある。ただ露出しているのは小礫のみで前庭部の石材にしては小型であるため、後世の撹乱等で墳丘が削平され、葺石等の石材が露出している可能性もある。いずれも現況観察であるため確証はないが、周辺の首長墳では横穴式石室を内部主体として採用しており、それが首長墳との関係を持つ小円墳にも広がる可能性は大きい。新田原古墳群44号墳、45号墳でも横穴式石室を採用している（梅原1941)。その他に、小丸川流域の事例になるが、木城町の永山古墳（石川1990）や高鍋町持田古墳群84号墳（谷口・西谷1993）があり、高鍋町野首遺跡においても小円墳の内部主体に横穴式石室が採用された事例が宮崎県埋蔵文化財センター（2003）で報告されており、また日向市伊勢ヶ浜古墳群

においても小円墳に横穴式石室が採用されている。このことから祇園原支群でもその事例がある可能性は高く、県内平野部の小円墳で横穴式石室を採用する事例はさらに増加すると推測する。

この問題と関連して188号墳と200号墳の墳丘を比較すると、その様相の違いが注目される。それはこの2基の墳丘径と墳丘高の関係にある。現状の墳頂が削平を受けていないことを前提に比較すると188号墳と200号墳は遺存状況の良い部分で約10mの差があるのに対し、墳丘高はほぼ同じという形態を取る。墳頂平坦面を比較すると188号墳はB－B'間で約13m、200号墳は約5.4mを測り、約2／5の広さになる。188号墳の形態は墳頂平坦面を広く取る低平な墳丘で、200号墳は墳頂平坦面が狭く、腰高な墳丘である。このことに関しては近藤義郎（1983）が指摘するように、竪穴系埋葬施設は葬送儀礼の場が墳頂平坦面であるためそのスペースが広く、横穴系埋葬施設は墳丘の横に葬送儀礼の場が移ることから墳頂部は狭く墳丘は石室を維持するものとなっていくといった変化に対応するものであり、墳丘の形態からも200号墳の内部主体が横穴式石室である可能性はある。ただ、200号墳の墳頂においても竪穴系埋葬を行うスペースは十分あり、宮崎県では6世紀～7世紀前半にも小円墳の内部主体に竪穴系埋葬施設を有する事例が高鍋町牛牧1号墳（宮崎県埋蔵文化財センター 2002)、等多くあるため（藤本1998)、墳丘形態から断定はできないが、今後の調査の視点として押さえたい。

参考文献

近藤義郎1983『前方後円墳の時代』

田辺昭三1980『須恵器大成』

宮崎県教育委員会編1985『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集』「浦田遺跡」

柳沢一男1989「古墳の変質」『古代を考える　古墳』

土生田純之1994「畿内型石室の成立」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5

重藤輝行1999「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開Ⅱ』九州前方後円墳研究会

乗畑光博1987「南九州における曾畑式土器群の動態とその背景」『鹿大考古』6

水ノ江和同1990「中・南九州の曾畑式土器」『肥後考古7』

有馬義人2003「祇園原古墳群」『宮崎平野の古墳と古墳群』第29回九州古墳時代研究会（宮崎県大会）資料集

相美伊久雄2000「深浦式系土器の再検討」『人類史研究Vol 12』

藤木　聡2000「敲石と石器製作」『旧石器考古学』60

梅原末治1941「新田原古墳群調査報告」『宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告第11巻』

石川悦雄1990「永山古墳」『木城町文化財調査報告書2』

緒方博文1993「伊勢ヶ浜古墳群」『宮崎県史資料編考古2』

谷口武憲・西谷真治1993「持田古墳群」『宮崎県史資料編考古2』

藤本貴仁1998「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古　第16号』

宮崎県埋蔵文化財センター2002「51.下耳切第3遺跡」『平成13年度東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ』

宮崎県埋蔵文化財センター2003「46.野首第1遺跡」『平成14年度東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ』

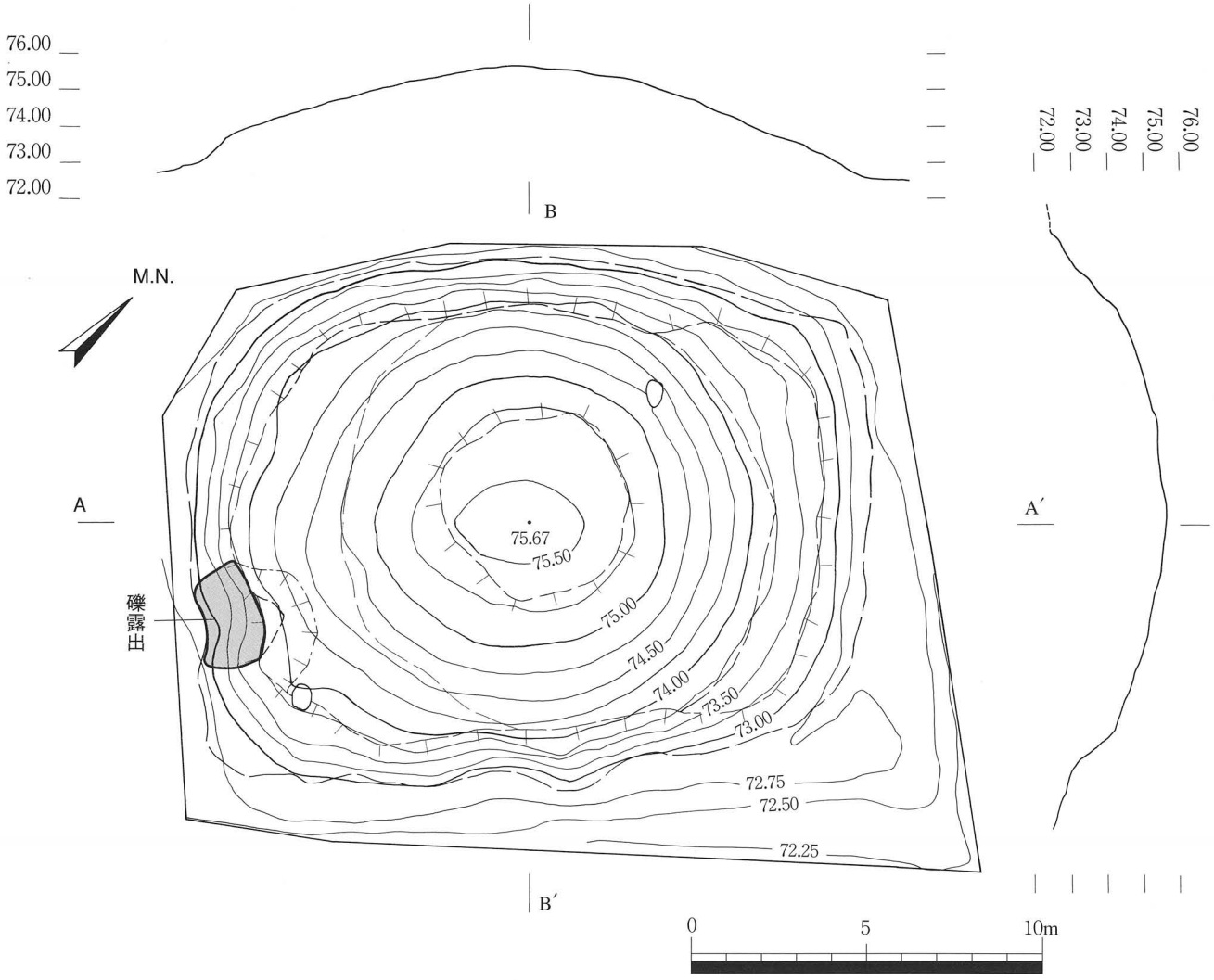


図23　新田原古墳群200号墳現況測量図・断面図　S＝1/200

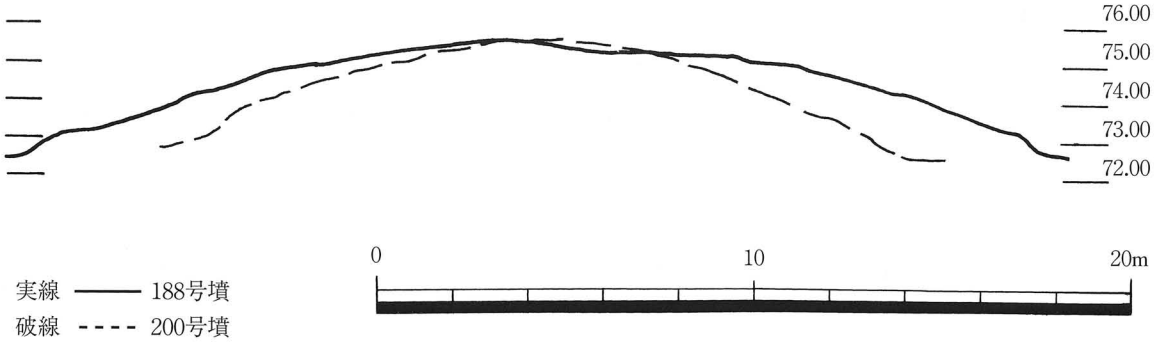


図24　188号墳・200号墳墳丘断面図比較　S＝1/200

図　　版

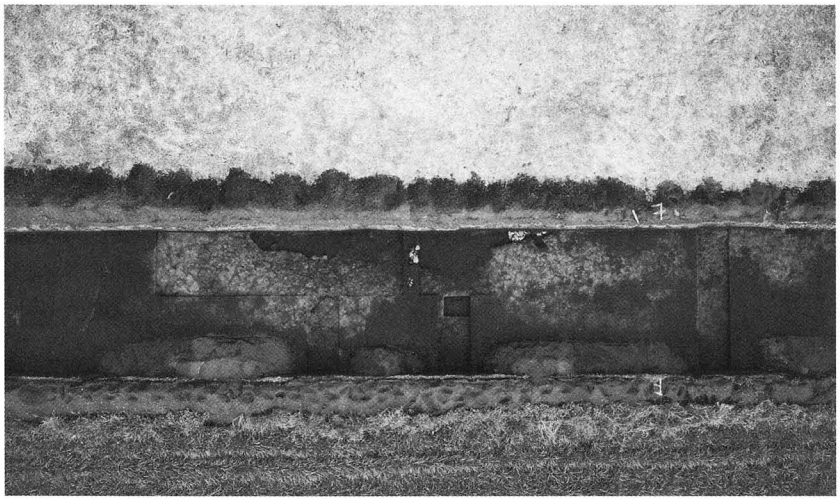
図版.1

①　調査区と新田原古墳群祇園原支群（西から）

②　2区全景

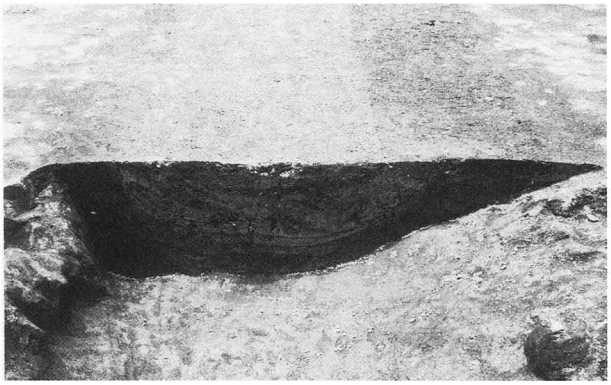
③　2－③区消失墳周溝

① 3区遺構 検出状況

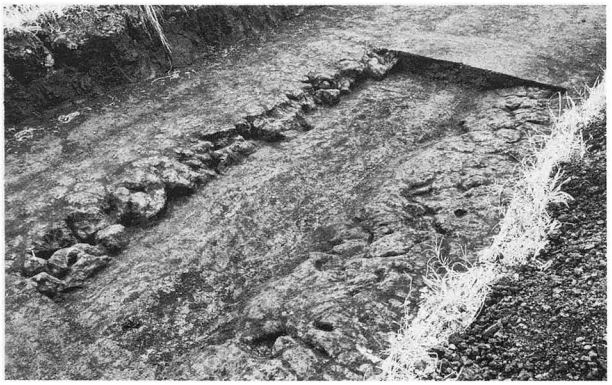


② 同上

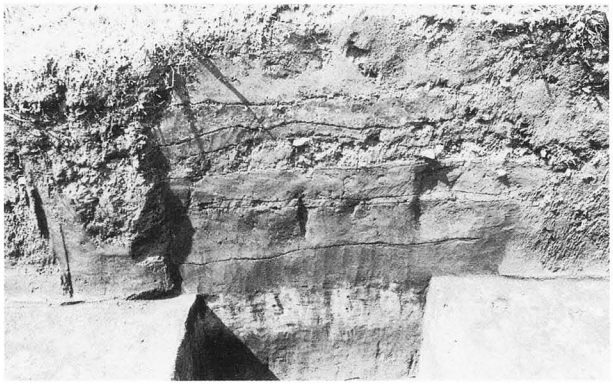
③ 1区溝状遺構



⑤ 溝状遺構土層図



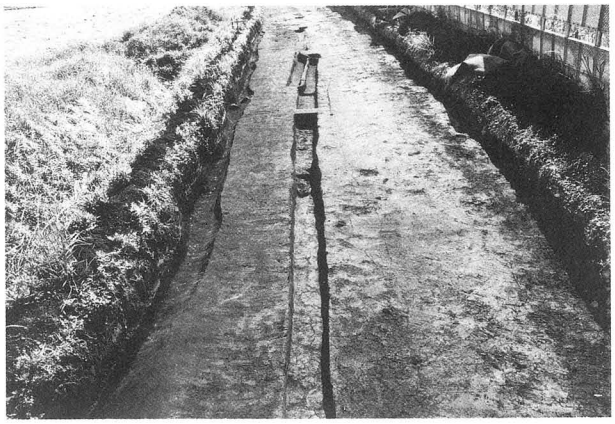
④ 溝状遺構掘削状況



⑥ 1区基本土層

図版.3

① 2区包含層 検出状況



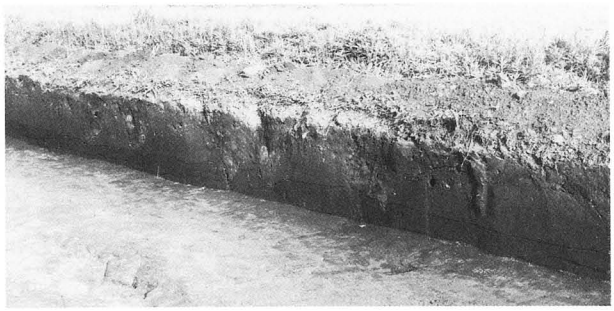
② 2区撹乱溝 掘削後

③ 2区A層 掘削後

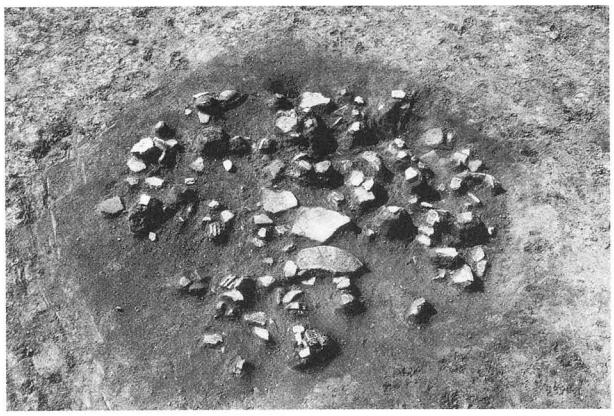
④ 2区B層 掘削後（アカホヤ火山灰層上面）

⑤ 2－2区 A－B間 土層図

⑥ 2－1区 基本層序

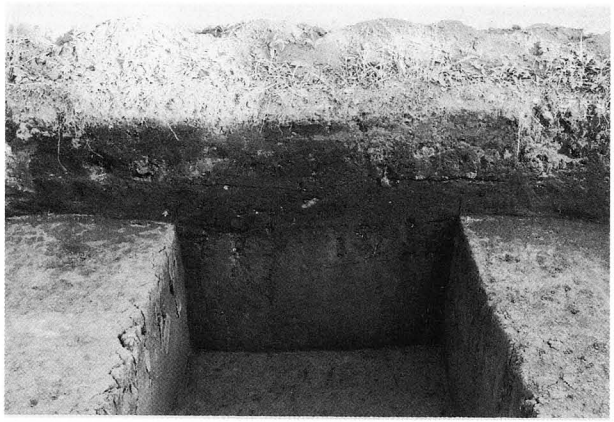


⑦ 2－2区 基本層序

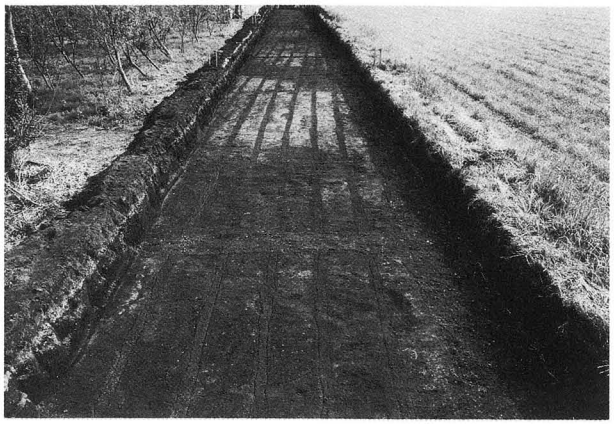


⑧ 2－2区 土器集積土坑

⑨ 2－2区 土坑掘削後

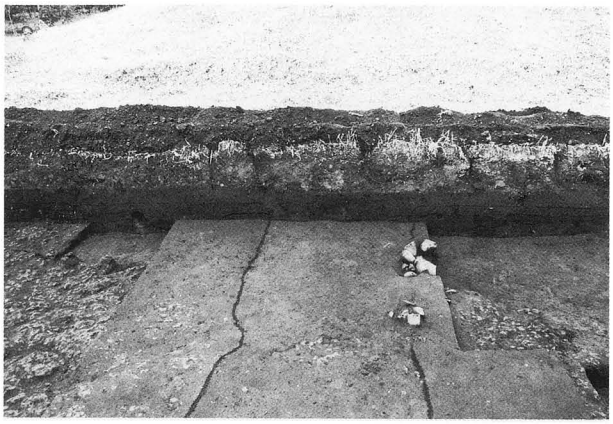


① 2－2区 基本層序2



⑤ 3区遺構 検出状況

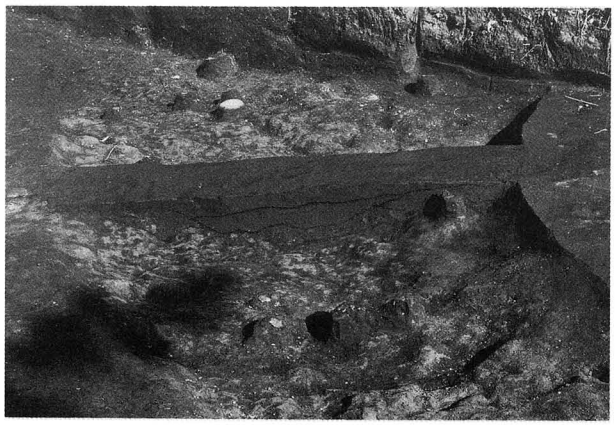
② 2－3区 消失墳周溝 検出状況



⑥ 188号墳周溝 検出状況と撹乱

③ 2－3区 消失墳 土坑掘削状況

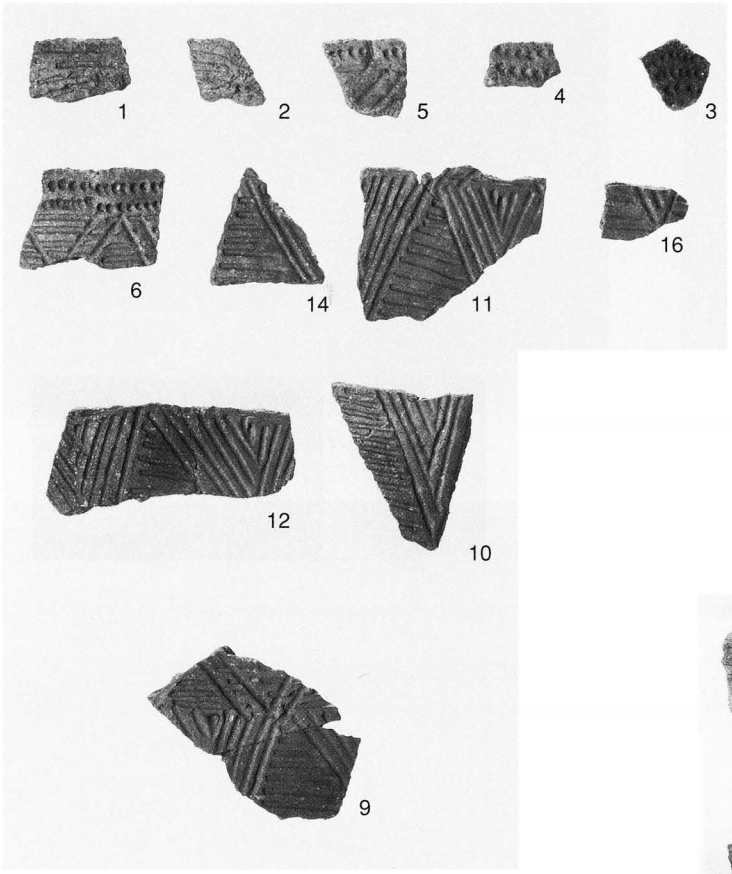
⑦ 同上



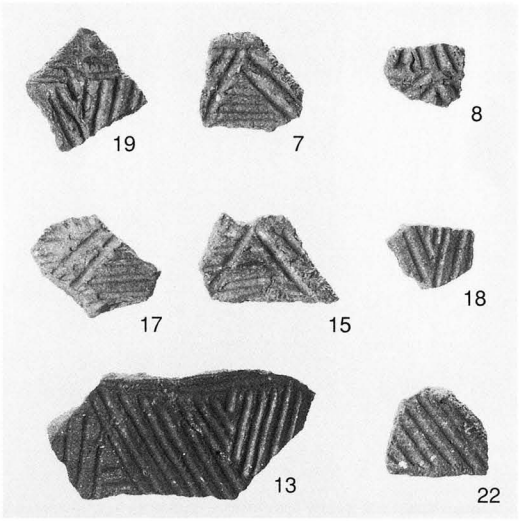
④ 消失墳 周溝土層図

⑧ 周溝掘削後

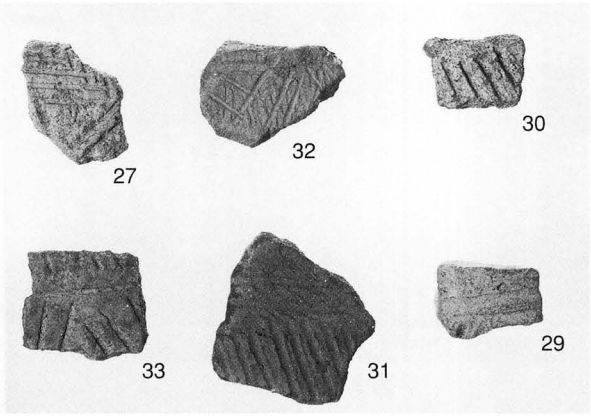
図版.5



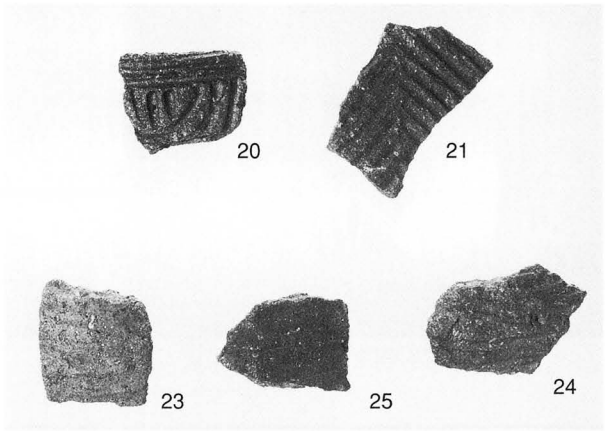
① 2区 A層出土Ⅰ－1類土器1



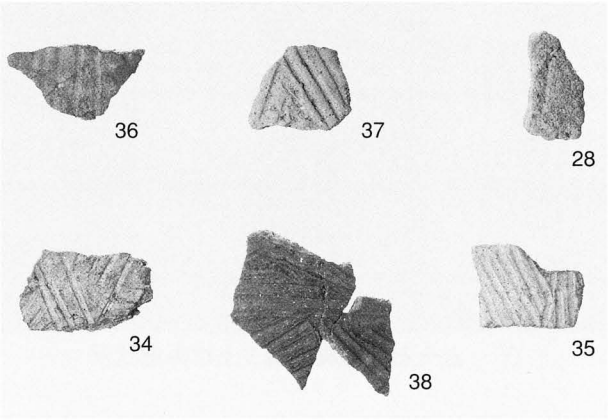
③ 2区 A層出土Ⅰ－1類土器3



④ 2区 A層出土Ⅰ－2類土器1

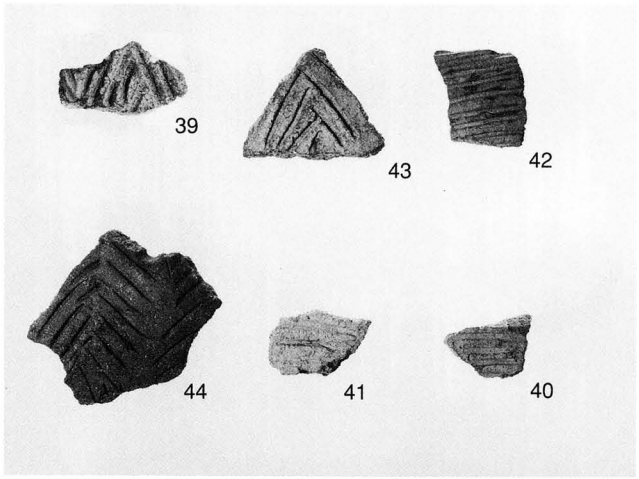


② 2区 A層出土Ⅰ－1類土器2

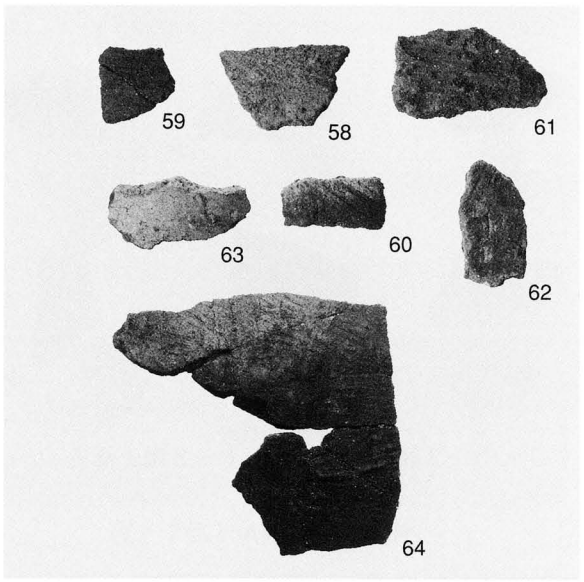


⑤ 2区 A層出土Ⅰ－2類土器2

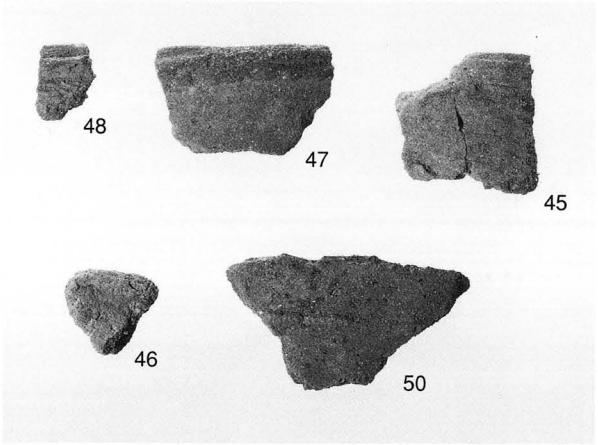
⑥ 2区 A層出土
Ⅰ－2類土器3



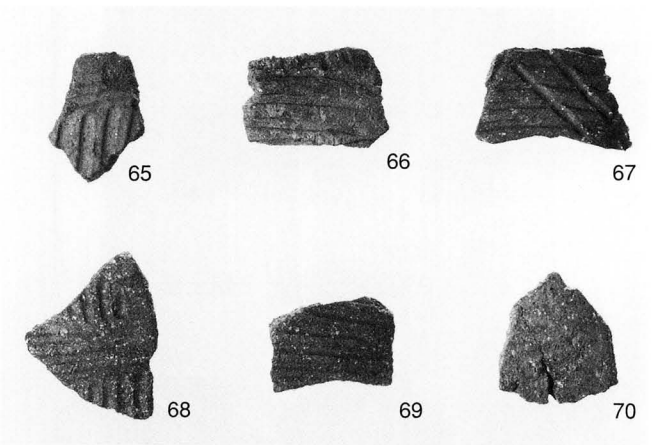
① 2区 A層出土 Ⅰ－2類土器 4



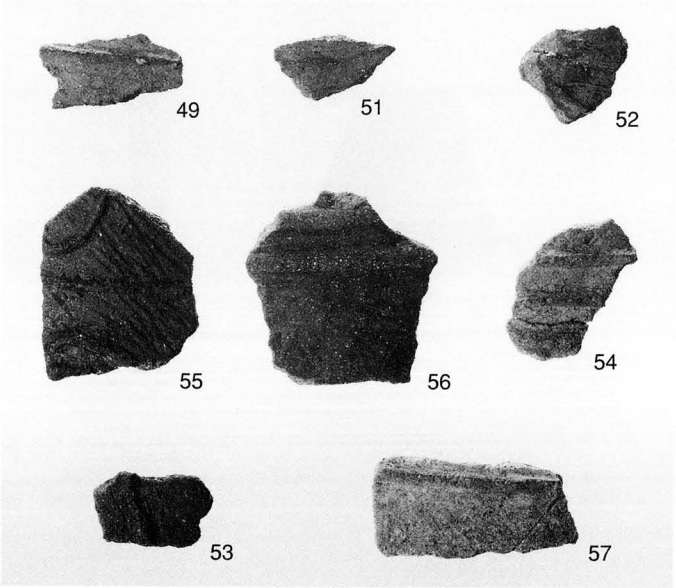
④ 2区 A層出土 Ⅱ類土器 3



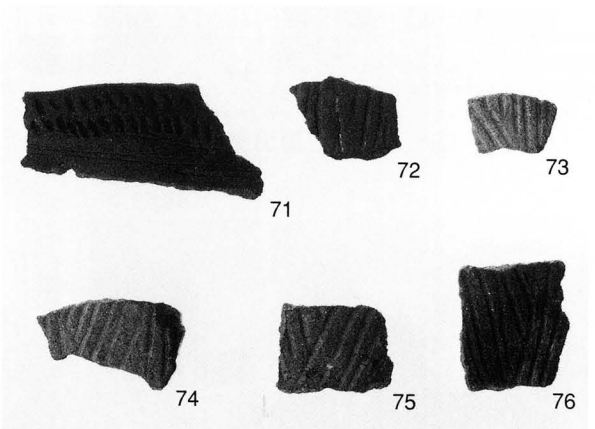
② 2区 A層出土 Ⅱ類土器



⑤ 2区 B層出土 Ⅰ－1類土器

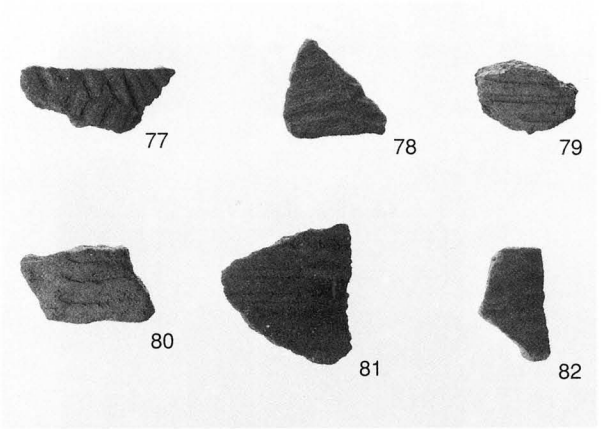


③ 2区 A層出土 Ⅱ類土器 2

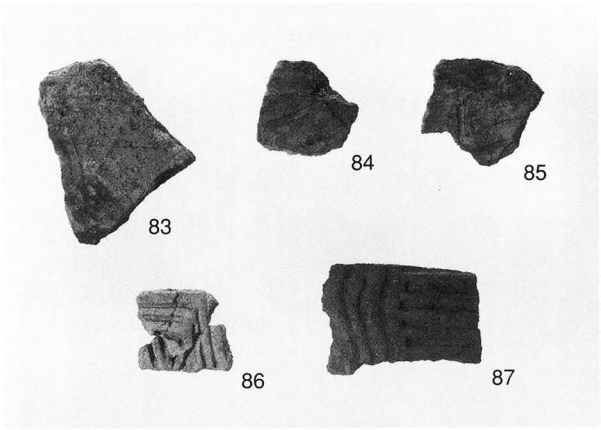


⑥ 2区 B層出土 Ⅰ－2類土器

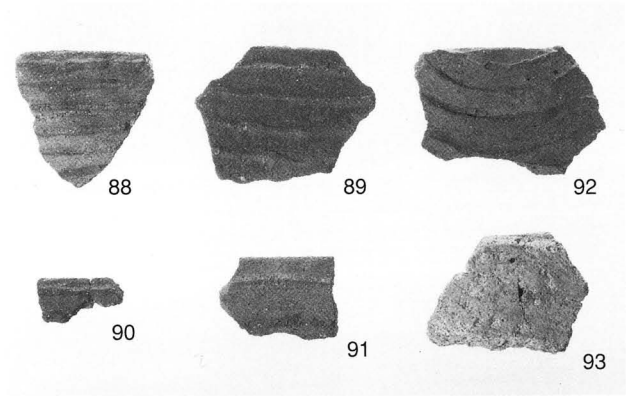
図版.7



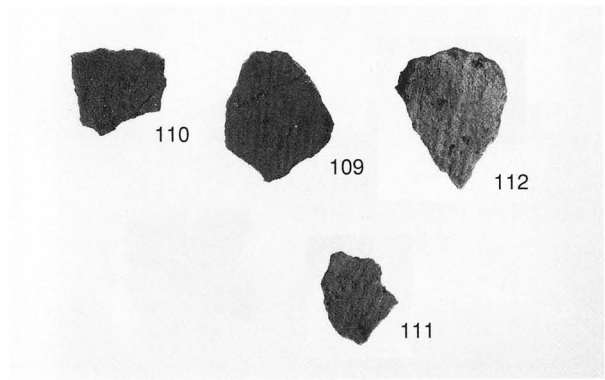
① 2区 B層出土 Ⅰ－2類土器2



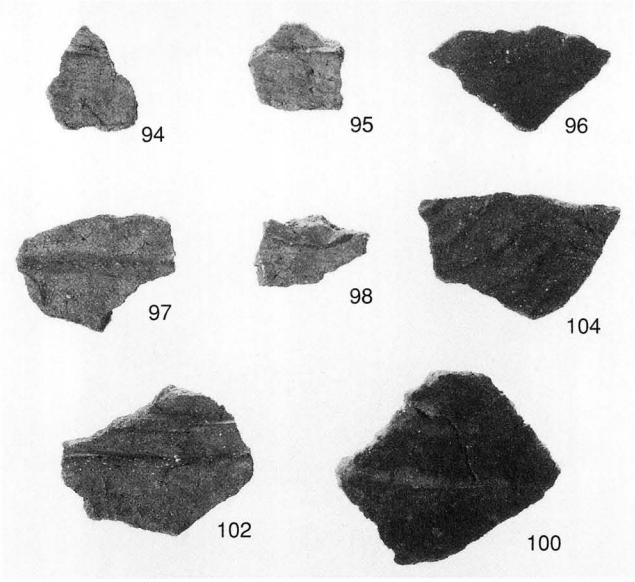
② 2区 B層出土 Ⅰ－2類土器3



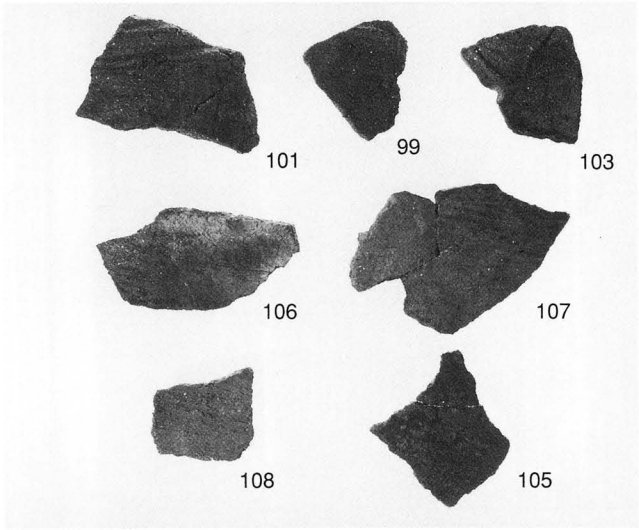
③ 2区 B層出土 Ⅱ類土器



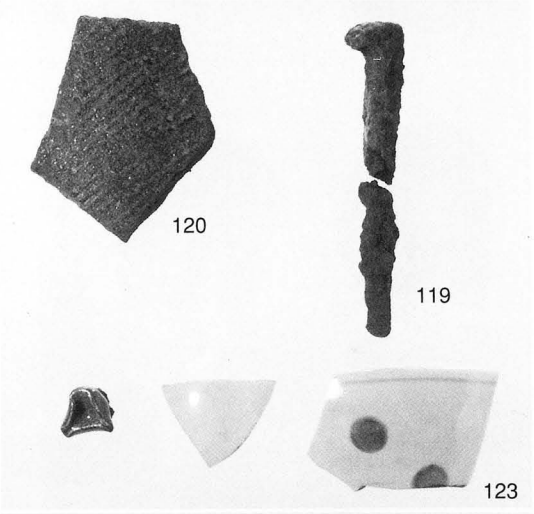
④ 2区 B層出土 Ⅱ類土器2



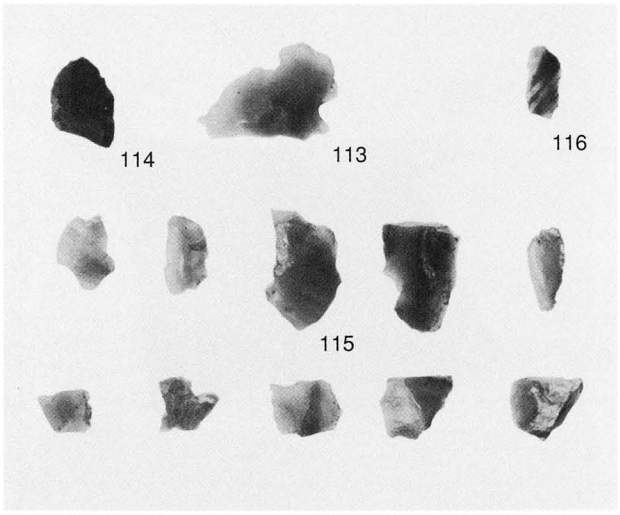
⑤ 2区 B層出土 Ⅱ類土器3



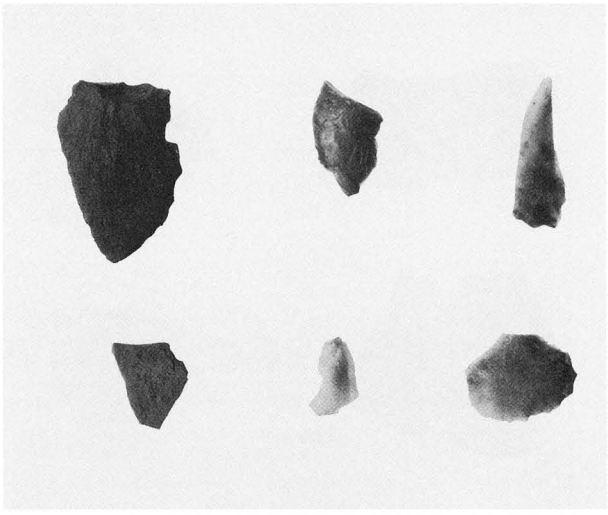
⑥ 2区 B層出土 Ⅱ類土器4



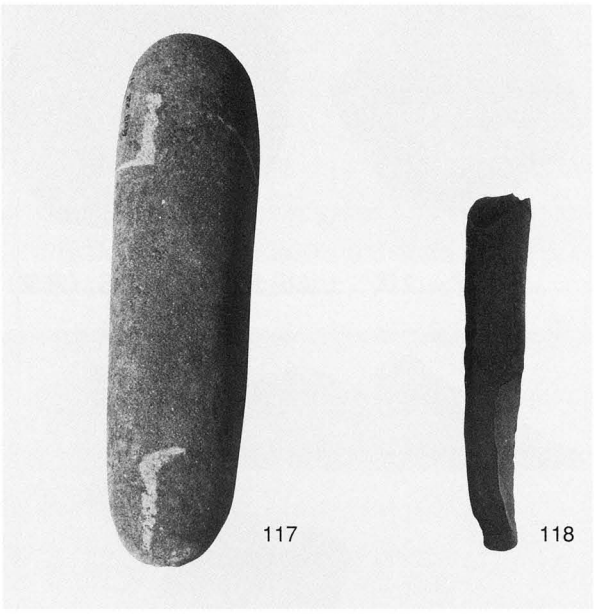
⑦ 2区 A層出土遺物



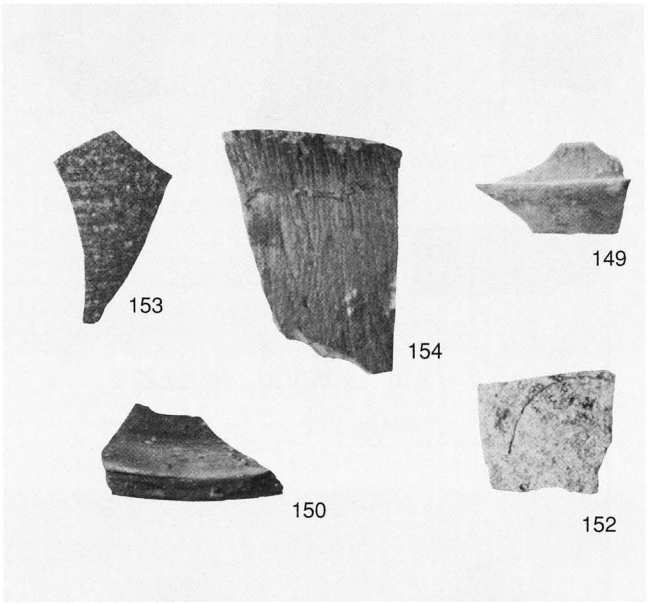
① 2区 B層出土 石器・剥片



③ 2区 A層出土 剥片



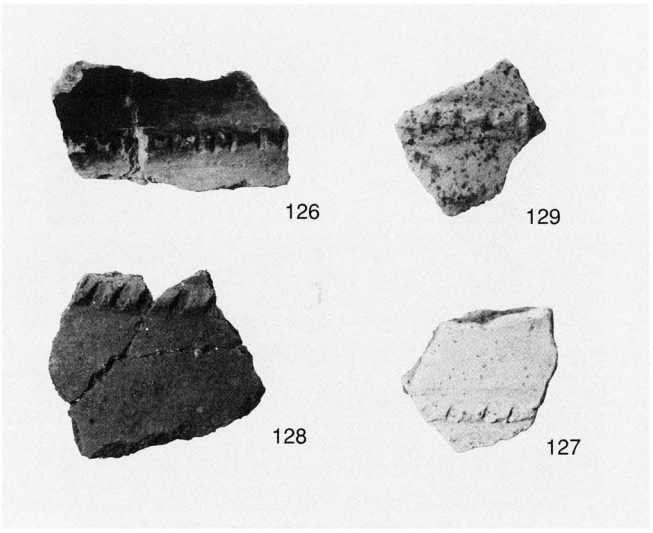
② 2区 A層出土 敲石



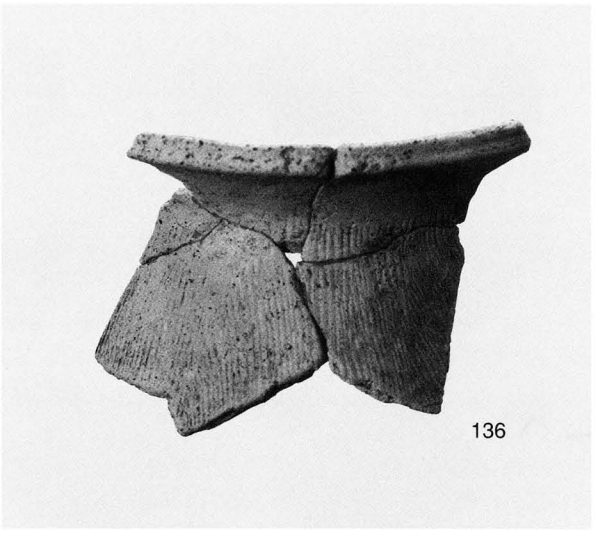
④ 2－3区 消失墳周溝出土 須恵器

⑤ 2－3区 消失墳周溝出土 須恵器

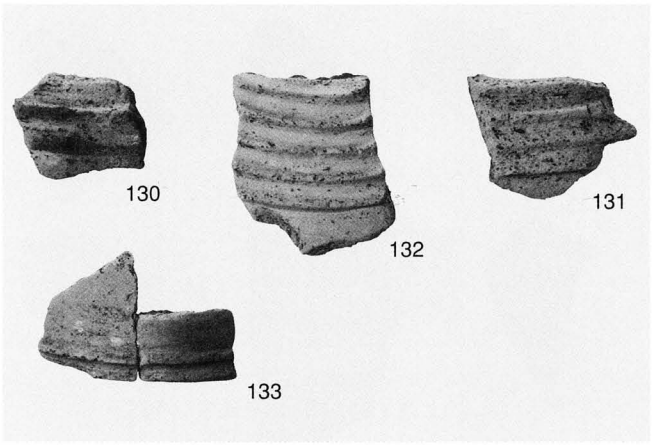
図版.9



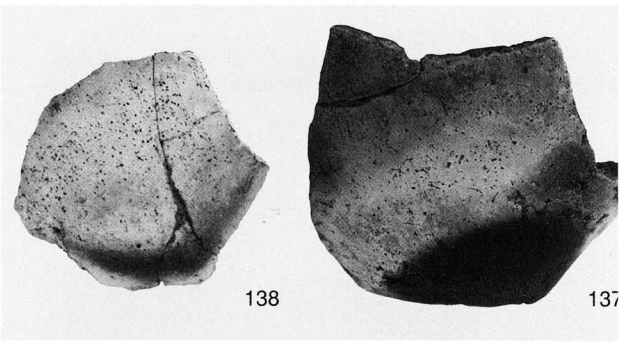
① 2－2区 土坑出土 弥生土器1



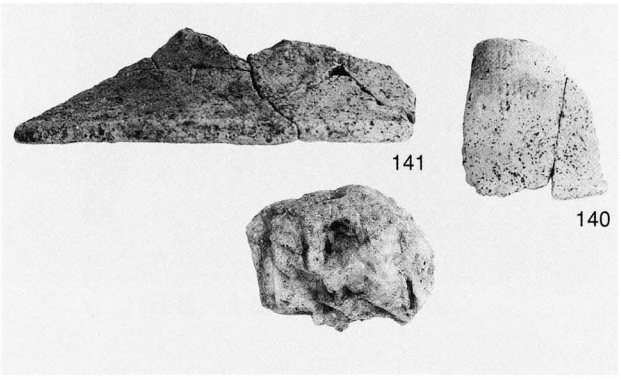
④ 2－2区 土坑出土 弥生土器4（壺）



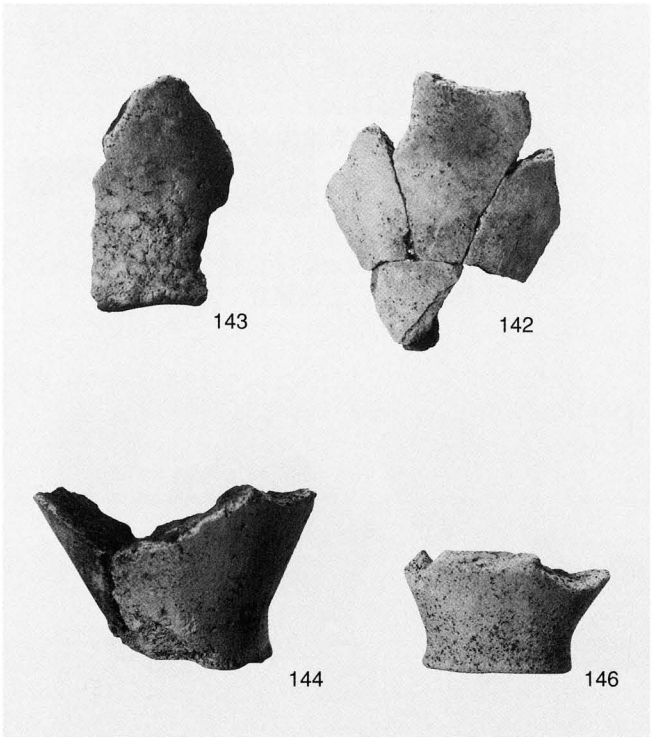
② 2－2区 土坑出土 弥生土器2



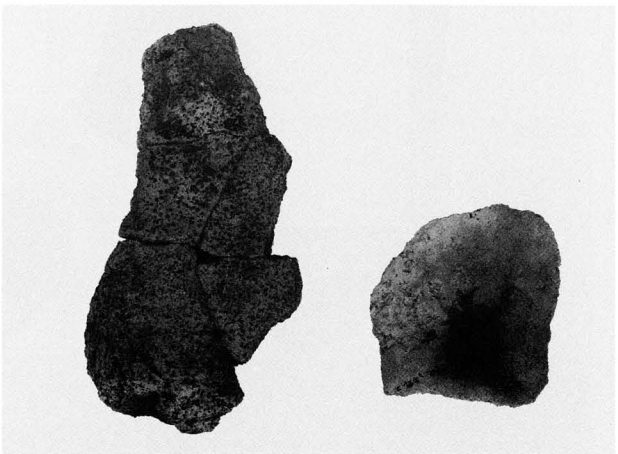
⑤ 2－2区 土坑出土 弥生土器5（底部）



⑥ 2－2区 土坑出土6 石英等



③ 2－2区 土坑出土 弥生土器3



⑦ 2－3区 土坑出土 弥生土器

報告書抄録

ふりがな	ぎおんばるちくいせき
書名	祇園原地区遺跡
副書名	県営一般農道整備事業（祇園原地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第37集
編著者名	津曲大祐
編集機関	宮崎県西都市教育委員会
所在地	〒881－8501　宮崎県西都市聖陵町2－1　TEL 0983－43－1111
発行年月日	2004年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間
ぎおんばるちく 祇園原地区 いせき 遺跡	みやざきけん 宮崎県宮崎県 さいとしおおあざみぎまつ 西都市大字右松 あざぎおんばる 字祇園原	1033 1034	X＝－99550 ～ X＝－99650	Y＝39900 ～ Y＝40150	2003.7.7～ 2003.12.5

調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
県営一般農道整備事業に伴う調査	古墳	縄文時代前期・弥生時代後期 古墳時代中・後期	古墳周溝 消失古墳周溝 土器集積土坑	曾畑式土器・轟B式系土器・深浦式系土器・石匙・須恵器・擬須恵土師器	縄文時代前期～中期の遺物包含層

調査面積	試掘調査	本発掘調査
		2,288m^2

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第37集

祇園原地区遺跡

県営一般農道整備事業（祇園原地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004年3月25日

発　行　宮崎県西都市教育委員会
〒881-8501
宮崎県西都市聖陵町2－1
Tel.（0983）43-1111

印　刷　有限会社　ふくしげ印刷
〒881-0005
宮崎県西都市大字三宅2445－7
Tel.（0983）42-3651